

第三部  
歌の建設



「母子寮……」  
「母子寮……」  
列車から驛へ、驛から隔離舎へ運れてゆかれながら、私はうわごとのやうに叫んでゐたといふ。あゝ、私の一生にとつて忘れられないこの日よ！ ことさらに又私の建設への道はつとく、どこまで続くぬかるみぞ！ 私は稿を改めねばならぬ。



建設以前から、建設への道——へ

そこで私は大きな障害におつゝかつた。

勿論、人様から見れば微々たる事柄ではあるけれど、母子寮建設にとつては悲しむべき事柄であつた。然しこの障害があつて始めて母子寮の建設があり、母子寮の歌聲がきこえ、私の人生が洗ひ浄められてゆくのである。

これはその間の反省と回想と感激の記録の抜書であり、この貧しき一冊の、エピソードでもある。

## 壁

昭和十五年八月二十二日の夜——

私は歸郷の途についた。

私の手には荒木閣下や奈良閣下や山本閣下の母子寮へ掲げる揮毫の書が抱へられてゐた。

車窓にじいつと考へると、やうやく私のジグザクな人生にも光りが見えてくるやうに覺えた。

社會運動に投じてゐた昔が、何か人ごとのやうに感じられた。自分と思はれない人間が、自分の名前でやつてゐるやうに思はれた。

これから本當の自分の人生が展らけてゆくのだ……

さう思ふと、私は限りない希望と歡びに満ち溢れて歸つてきた。

しかし、車中で腰を下してゐると、ぐつと襲つてくる疲労があつた。張り切つた氣持でありながら、からだの一角が空氣抜けしたやうな氣だるさにおそわれた。

「疲れがきたのかな……」



そんなに思つたが、完成を近くに控へて、休養どころではなかつた。このまゝぐつと押し通さなければならぬと思つた。小田原から熱海へかゝる頃になると、どうしても坐つてゐられないほどの疲労を覚えてきた。頭のでつべんが、丸で錐でもまれるやうに痛んできた。眞夏だといふに、背筋が妙に寒々としながら、全身は焦げるやうに熱く、額から汗が流れ落ちてきて仕方なかつた。

「風邪かな……」と思つたが、風邪にしては今迄にない状態だつた。

次第に視野がぼんやりしてきた。向ひ側の人の顔が、遠くなつたり近くなつたり、その顔が、久保の顔や妻の顔や子供の顔になつたりした。

幻げながら、私はひどい病氣にとつゝかれたと思つた。

このまゝ死ぬんぢやないかしら……今迄考へたことのない死が、私の思ひの中に浮び上つた。「くそつ！ 死んでなるものか……」

私は無理に身を起そうとした。周囲の人が、何かわめきながら起ちかける氣配を感じた。

無意識のうちに、私は靴と書を抱きしめた。それきり私は朦朧とした霧の中に轉落してゆく自分を見た。どこともなく揺られゆられてゆく自分……それから何時間立つたのだらう？ ふと、私は白い壁を見た。暗い色の白い壁だつた。灯のかけがそこへさしてゐる。「どこだ？」はつと

した時、私は頭の上下に、ひんやりとした感觸を覺へた。氷囊だつた。

「お氣がつかれましたか……」

耳元で囁く聲がした。見廻す眼に白衣の女が立つてゐた。

見知らぬ顔だ……とつさに、私はこゝが病室であることを知つた。

列車中で倒れかゝつた自分——、それ迄は私もはつきりと意識してゐるが、それからは何が何んだかよく解らなかつた。

しかし、今、見知らぬ病室に、見知らぬ白衣の女に看護されてゐることは疑ひもない事實だ。

「一體僕はどうしたんです」

私は看護婦に聞いた。

看護婦の語るところによると、私は列車中に發熱し、昏睡状態に落ち入つたのを、このK町の驛で下され、そこからこの驛近い病院に移されたことが判明した。そして私の症状が、どうもチブスの疑ひがあると云ふことだつた。「チブス……」私は愕然とした。豫期しない名だ。いかに建設への道に幾多の障害があることは覺悟してゐたが、まさか自分がチブスなんかにつづかれやうとは思はなかつた。

チブス……さういへば何時もの風邪とはちがつた症状だつた。しかし、さう思ふ一面、そんな



馬鹿なことが……と、私は強くうち消さうとした。しかし、この火のやうに熱してゐる全身は私を深い奈落へひきづつてゆくやうな、不安を感じさせた。

「どうぞお静かにして……」

看護婦はそつと私を制するやうにした。おのづと、私の云ひ知れぬ苦悶が、全身を波打たせたらしい。

間もなく若い醫師が診察にきて、血液をとつて行つた。私は何か犯罪者のやうに、それを迎へてを送つた。

血の一滴が、隠くして置いた證據物件でもあるかのやうに私には感じられた。

「チブス患者か否か？」

やがて裁断されるときがくるのだ。もし、チブス患者と裁断されたとき、一體自分はどうなるだらう。勿論、隔離舎へ送られる。そこで何ヶ月か過ごさなければならぬ。さうしたとき、故郷の建築半ばにある母子寮はどうなるのだ？ 資金は不足だ。しかも、自分に代つてくれるべき友たちは、皆職業を持ち、自分の如き純粹に社會事業に挺身する自由を持つてゐない……。延してはならない國家の仕事を、目下の急務である母子寮建設を、自分個人の病氣のために遅延したのでは、何んとしてもすまないことだ……。しかも、この仕事こそは、かつて過てる思想をもつた

男のこの世に捧げるさみしき償ひではなかつたか……。それを、今此處で、生死もわからぬ熱病にとつつかれて挫折したのでは、あまりにも情ないことではないか！ 私は悶えた。

私は泣けてきた。看護婦は狼狽したらしく、「どうぞあまりお考へにならないで……」 勞るやうに、落ちかゝつた氷囊を直した、その顔が妻に見えた。そして、再び深い眠りともつかぬ茫とした世界へ、私は夢遊病者のやうに泳いで行つた。

妻がゐた。

私の顔をジツとのぞき込んで妻がゐた。」

夢とも幻ともつかぬ。

「あなた……」

やはり妻の聲だ。

本當の妻が傍にゐたのである。

私が深い昏睡に落ちてゐる間に、警察からの非常通知のはからひで、妻は郷里から駆けつけてきたのだつた。

「あなた、しつかりして……」



妻は力をこめて私に呼びかける。私は笑ふとしたが、代りに無性に涙が溢れ出た。

「すまない……」

開いた口へ、しみ入るやうに涙が喉へひつかまつた。

二人とも向ひ合つたまま、それ以上何も云へなかつた。

われさうに頭が痛い。

見上げる灰色の天井に、黒いかげがさして見える。

何か不吉な豫感がする。

顔の上を彷徨する一匹の黒い蠅が、恐しい使命を持つてきたやうに思はれる。

「妻よ許せ……」

私は眼をつぶつた。氷を割る音を遠く、再び私は苦悶の世界へ墜ちて行つた。

二日目の朝――

遂に私は裁かれた。私はチブス患者の裁断を下されたのだ。しかも、永い間の疲労から、相當の重症患者だといふことだつた。妻の持つてきた浴衣に着代へ、私の持物すべては消毒へ渡されて、愈々この町の避病院へ送られることになつた。

念頭にあつた揮毫の書だけは汚さぬやうに頼んだ。

「そんなこと考へないで下さい……」

すべてを解つてゐる妻は、私に細い神経を使はせないやうに氣を配つた。しかし、今朝の私は一晩ですつかりからだは衰弱したが、意識はハッキリとしてゐた。立上りながら、ちらつと見た病室の窓外に、新秋の富士の、あまりにも近く、あまりにも殿しく、そより立つて、何か私をにらんでゐるやうに見えた。

やがて、黒いベールに包まれた寝臺車に乗せられて、この病院から郊外の避病院に移されてきた。

第一號室が、これからの私の住居となつた。重症患者のための一人きりの部屋で、六疊ばかりの中に寝臺と附添人の僅かな座敷が出来てゐた。

前方には一間のガラス窓があり、窓の向ふは雑草の茂げつた庭らしかつた。

こゝで改めて検診があり、チブス患者としての生活の第一歩を踏み出したのである。

「奥さんからお聞きしましたけれど、大變なお仕事の眞つ最中に、こんな病氣にとつゝかれて、本當にお氣の毒です。しかし。これも運命まなづかられたことです。あまりあせらずに、充分からだを直してからやるんですね……」五十がらみの院長は手を取りながら優しく慰めてくれた。



私はうなづきながらも、何んといふ變り果てた自分の姿だらうと思つた。建設の思ひに胸をこがしたときの自分と、今のこの佻しい姿を考へると、又新らたに口惜し涙が滲んでくる。父母も子供たちも、歸らぬ父を待つて、どんなにか悲しさに沈んでゐるだらう。考へまいと思つても考へ出された。

とりわけ中風の母の身が氣づかわれた。

そして、その後から、大きくクロージアップされるのは建設半ばの母子寮の姿であつた。

何も思ふまい……

何も思ふまい……

これが院長の云つた通り自分の運命なのだ……

さう思つて、猛ける心を、胸をさすり頭をふつてぶちこわさうともがいた、もがけばもがくほど、色んな幻想が浮んでくる。さうした間に、院長と妻の對話が洩れてくる。

全快は早くて二ヶ月、癒つても當分は活動が出来ないといふこと、それはかなりからだに疲労してゐるので、それだけ全快が遅いといふことや、半年位は静養を覺悟しなければならぬなどと云ふ言葉が、餘計私の神経をいら立たせる。小聲で云つてゐることも、私の全神経をえぐるやうに聞こえてくるのである。しかし、どうせ聞かねばならぬことだ。そして、それに對する方法

を考へねばならぬ、と、いら立つ心の反面に、落ちついた考へも浮んでくるやうになつてきた。

それでも晝間は未だよかつた。夜ともなると襲ひくる熱と共に、私は何か狂はしいやうな氣分になつてきた。かつと燃えてきては、又冷靜になつたりした。

そんなとき、ふつと、遠くフクロウの聲などを聞いた。

ひつそり閑とした田舎町の夜の、時折の列車の響きが、丸で私の脊筋を、冷めたい手で撫でてゆくやうに聞こえた。

かなしい夜だ。あまりにもあまりにも哀しい夜だつた。石塊のやうな、ちいさき建設者の夢の成るか成らぬかの思ひに焼くる哀しい夜だつた。

「神よ、一體私にどうしろと云ふのです？」

私は狂はしくなつて、わめくやうに叫ばふとしたとき、枕元で、

「あなた、お苦しいですか……」

妻の優しい聲がした。

ハツとして我れに返ると、私は靜かに首を振つた。

「何もお考へにならぬ方がいゝですよ……」

さう云ふと、妻は私の氣でもまぎらそうとしたのか、つと窓ぎわによつてカーテンをひいた。



「いゝ月夜ですこと……あなた、お見えになりませんか？」

私は聲の方を仰ぎ見た。

そして、その美しい月を見るよりも、その月光に濡れてゐるやつれた妻の横顔をじつと見た。

## 窓に描く

一日と立ち二日と立つうちに、幸にも私の熱は下つて行つた。

院長からも生命には心配ないと云はれたので、五日ばかりゐた妻は、看護婦を雇つて一先づ歸郷した。

日と共に私の興奮もさめて行つた。

もがいてもどうにもならない……

あせつても癒るものでもない……

さうしたあきらめが日と共に出てきた。

母子寮のことが氣がかりであつたが、これもやむを得ないと思ふやうになつてきた。それよりこれからの此の六疊の人生を、怠屈な世界を、どうして送るべきか？ そんなことを考へるやうになつた。

誰れかゞ病室は修養道場だと云つたが、確かにさうかもしれない、考へること以外に何もものない生活である。

従つて反省や回想がその生活の全部であるとする、そこから何かしら生れてくるかもしれないのである。

さすがに富士山麓だけあつて日中も涼しかつた。さわやかな風の彼方に、未だ雪のすくない、こみどりの裾の尾をひいた壯年の富士が見える。しかも、去來する雲はすでに秋の風色である。夜となつても、一匹の蚊もなく、窓を透して美しい月がさしのぞく、まばらに星が降つてくる。

この病室の窓こそが、今の私の楽しい夢の世界だつた。

新秋の匂ひに、外の花を思ひ、花の色を聯想した。

夜となく晝となく私はこの窓を仰ぎ見ることを楽しむやうになつた。うつりゆく空の色から、いろんな昔の幻影が夢のやうにひらけてゆくやうな氣がした。

この悲しい現實の自分を忘れて、いつ迄も遠い昔の夢に浸つてゐたかつた。今の私にはそれが



一番の逃避行の場所だった。むかしの、悲しいことも辛いことも、今想へばみんな懐しい思ひ出となるものだ。よぎつてゆく雲の一片一片は、遠い少年の頃へ、回想のページを繰りひろげてゆくのである。

父の肩車にのつて、一つ山を越えて、軍神社の祭りの花火を見に行つたことや、夜店の一番大きな凧をせがんで母を困らした頃のことなどが懐しく甦つてくる。

そして、遠い故郷を持つた父の苦しかつた生活のすがたなどが浮んでくる。

私の父は九州の博多生れだ。その昔、黒田さまの家臣だった祖先の血をひいて、曾祖父は商家の俵ながら、熊本の大鎮臺兵となつて死んだ。その氣風を受けて若い頃から血の氣の多かつた父は青雲の志を抱いて故郷を飛び出してきた。そして、あらゆる逆境に立つて静岡に落ちつき今の母と一緒になつた。父の商賣は菓子卸商だった。その中に私は生れた。

我儘に育てられた。貧しい中からどんなに父は私を愛したらうか……思ひ出しても胸の痛くなるのを感じる。

人一倍我儘な私は父たちの生活の苦勞も頓着なく、高價な玩具をねだつたものだ。そんなとき玩具を買ふために明日の米代もそれに代へた父だった。父は自分の希望を私にかけてゐた。しい人一倍徹な、直ぐと怒りつばい父が、私にはいつも相好をくすしてゐた。貧しい生活の中か

ら、私は土地の中等學校だけは終へた。

しかし、それ以上ゆけなかつた。つぎつぎと友達が勉學に上京してゆくのを私はじつと見送つた。私は偉くなりたかつた。誰れよりも偉くなりたかつた。姉の嫁入つてゐる東京の義兄を頼つて私は苦學をすべく準備をした。父母に内密で荷物をつくつた。

それが發見されたとき、生れて始めて私を怒つた父の顔を見た。「お前は……お前は……」父は激怒して荷物を床に叩きつけた。

私は生れて始めて父に頬を叩かれた。叩かれながら盗み見た父の顔は涙で濡れてゐた。

悲しい怒りだつたのだ。さみしい怒りだつたのだ。「偉くなつてくれよ……」さう云つて育てよきた父の私を手離せないさみしさだつた。父のやるせない怒りを知つた私は、叩かれながら父の心に泣いてゐた。

十八の春の冷めたい雨の晩だった。それから私は夢中に働き出した。二三人ゐた弟子たちと、遠い田舎までも行商に出掛けた。

頭一つ

なぐられしとて物賣れと

教へられたる行商人われ



その頃の行商人の忍従の歌だ。その頃から歌や詩などをやり出した。そして、たゞ黙々と働いた。好景氣の波にのつて四五年のうちに自分の家も建てた。

さゝやかな製造工場もつくり四五軒の貸家も出来た。父は皆に押されて町の菓子商組合長などになつた。さうした中に私は文學から社會運動に入つて行つたのである。しかし俸のやつてゐることがどんなことであるか父はよく知らなかつた。又私も社會運動の最後のものまではよく解らなかつた。たゞ暗い文學から受けた人生觀が、いつか、社會運動と結びついてしまつたのである。従つて、父は私のやることに干渉しなかつた。そればかりでなく、色んなところに限りない父の愛がこもつてゐた。

こんなこともあつた。

それは私たちが故郷で、文化運動として演劇をやつたことがあつた。「吹雪」といふ劇で、私の扮する父親が、久保の扮する息子の死に直面して、吹雪の中で父親が泣きわめく場面だつた。父親が吹雪の中で泣きわめいてゐる中に緞帳が下りて終りとなるところが、緞帳が中途にひつかゝつて下りてこない。弱つたことになつてしまつた。父親になつた私は舞臺で紙屑の吹雪を口に受けてむせびかゝつた。

芝居がぶちこわれさうになつた。

そのときである。二階の觀客席の中央から、「引幕!!」と怒鳴る聲がした。

それに氣づいた係が引幕を引いて、やつとこの芝居をぶちこはさすにすましたのだつた。

その聲は父の聲だつた。父の聲だと知つたとき、本當に舞臺で泣いてしまつた。

こんなところにも優しい父の愛がひそんでゐたのである。

時の勢に任せて、私は社會運動に身をさらした。

「これは？」

と、父が眉をひそめたとき、すでに遅く私は檢學されてゐた。幸にも無事歸されてきたが、未だ私の興奮はさめなかつた。それが滿洲事變や上海事變などの影響で、やつと私が自分から運動をひく頃、商賣は駄目になつてゐた。それは私が商賣に身を入れないのが大きな原因だつた。

そして現在のアパートへ商賣替へをしたのである。

私のために苦勞し續けてきた父……

私のために病を起したやうな母……

何んといふ私は不孝者だらう……

アパートの經營の傍ら、私が托兒所を經營するやうになつてから、ホツとした父は急に年老つた。それでも健康な父は、子供たちの砂遊び場やプランコなどをつくらつて私を手助けた。



今度の母子寮の仕事でも、父はどんなに大きな期待をもち續けてゐたかしのだ……。それなのにこんな病ひにとつゝかれて、尊い仕事を放棄しなければならぬなんて……。何んといふ不甲斐なさだ。しかし、これも昔の罪の報ひかもしれない……。窓の空に描く昔の夢は、甘くそしてきびしく、やがては私自身を賣める夢となり果てゝゆくのである。

今宵の夢のきびしかつたことよ……

空が白む。

明け方のこぼろぎが鳴いてゐる。

みじめな下川よ！

明日は又明日の窓の空へ、嬉しい夢でも描くがよい。」

## 日本の歌

「思つたより快方が早いかも知れない……」

院長の言葉は、何より私を元氣づけた。

故郷からは三日に一度四日に一度と妻がやつてきた。

ずつと看病をしてゐたかつたし、私もゐて貰ひたかつたが、年寄り子供を抱へての妻は、あまりにも仕事が多かつた。責任が重かつた。妻なくしては留守の家はやつてゆけなかつた。

しかし、院長から安心を與へられたので、私も妻に留守の方を頼み、妻は私の孤獨を淋しみな

がらも、私の云ふ通りに歸つて行つたのである。

「獨りだつて大丈夫だ……」

さうは云つたものゝ、歸つたあとは、さすがにさみしかつた。附添の看護婦を妻と間違へて呼

んだりした。

窓さきに日輪草が咲いてゐる朝だつた。妻と共に久保がはるばる見舞にやつてきた。

「やあ……」と、云つたきり久保は一瞬顔を曇らしたが、

「鬼のかくらん見たいなもんだなあ……」と、いきなり笑つて見せた。

私もつられて笑ふとしたが、いつに變らぬ久保の友情が胸にこみ上げて涙が滲み出た。

「すこしはいゝのか？」



「うん 院長の話だと大分いゝらしい」

「さうか、まあさうくよくよしない方がいゝぞ。大分疲れただらうから、静養でもする氣であるよ。俺は妻君の手紙で驚いてしまったが、やつと今日來られたわけだ。もうと早く來たかつたが生命には別状ないらしいから、お前がすこし落着いたところへ來た方がいゝと思つてな、どうせお前のことちや母子寮狂ひ見たいに、浮ごとでも云つてゐただらうからな。はゝゝゝ」

久保の云ふ通りだつたのだ。

「しかし、何しろ母子寮のことが弱つたな。未だ相當金が必要なのに、御本人さんが此處にゐたでは、どうにもならない。一體君はどうする考へだ？」

久保も共に母子寮のことが氣がかりなのだ。

「どうすると云はれると、僕も困るが、一體いつ迄此處に置かれるのか、それによつて方法を講じたければ、何分ヂプスなんて奴は何時癒るかわからないから弱つた……」

私の言葉に妻は、「院長さんは、順調にゆけば、二月月位で出られるかもしれないと仰有つてゐます」

「二月月……二月月位ならいゝがなあ……」

久保は云つた。

「さう……二月月位なら僕も我慢できる……母子寮の方だつてその位なら延びても何んとかなるだらう……どうだ久保……一度請負師に逢つてこの事情を話して、僕が此處を出られるまで、支拂ひの方を猶豫するやうに頼んでくれないか。そして工事だけは一刻も早く必要な施設だから進めてくれるやうに……」私は久保に頼んでみた。

「うむ……さうするより他あるまい。よし、俺に任せておけ……」

そして、久保と妻は夕方まで私の傍にゐて歸つて行つた。二人が歸つたあと、すこし無理したのか、ぐつたりと疲れてしまつた。

うらうつらと眠りつゞけてゐるうちに、ふつと、どこからともなくラヂオが聞こえてきた。今迄氣づかなかつたのか、それとも今夜始めて聞こえてきたのか、ともかく、外の何ものにも飢えてゐる私にはうれしかつた。思はず聲の方に耳をそばだてた。新體制第一回準備會が開催されたことが報せられてきた。私は胸をときめかした。いよいよ日本の逞しい夜明けがくるのだ。

何ものにも動じない日本の建設工事が始つたのだ。

つぎ／＼にひゞいてくる聲……あゝ、近衛公の新體制指導理念の聲明が聞こえる。

新しい世紀の聲だ！ 新しい歴史の夜明けの聲だ！

烈々と建國の大義を説き、不動不變の帝國の信念を宣言し、一億一心の逞しい發足を強調し、



國民の最高の榮譽と最低の生活を保證した……

その言々句々……私は魂の震へてゆくのを覺えた。」

震へる魂は私の一切の雜念をふつ飛ばした。

「感傷を踏み越へよ……」

「逆境に泣くな……」

「日本人らしく生きよ……」

つぎつぎに私の心の一角に燃え上るもの、それは日本人の血だ。」

さうだ！

明日から元氣で行かう！ 元氣で、病氣なんかふつ飛ばせ！

昭和十五年八月二十八日の夜である。

九月四日——

新秋の夜空に星はかなしく瞬いてゐた。

この日、北白川宮永久王殿下が、蒙疆で御戦死遊ばされたことが傳へられた。

御父子三代に渡らせられての壮烈な御忠誠を想ふとき、私は病氣の身も忘れておのづから頭が

たれてくる。

國民の中にも父子三代に渡つて祖國に殉じたものは數すくないのである。

高貴の御身のこの殉難報國のお姿には、恐らく國民として哭かぬものはなかつたであらう。

私たちはよく詩吟道場で御祖父北白川宮能久王殿下の「臺灣入り」の詩を吟じたものだ。

泣きながらその詩の講義をする私の叔父だつた。

泣きながらその詩を吟ずる青年たちだつた。

今御孫に渡らせられる永久王殿下の御戦死の報に、私達の詩吟道場では、叔父とその青年たちによつて「臺灣入り」の詩が吟じられてゐるだらう。

かうしたことを考へると病床の身も忘れる。

窓の星空へ向けて、私はかすかに吟じてみた。

臺北悠々仁政成

皇軍到處湧歡聲

旭光將被臺南地

織被渠魁安萬生

吟するまゝに、泣けてくるまゝに、私の胸は洗ひ淨められたやうにすつきりとしてきた。



詩の精神に自分の魂がふれてゆくのである。重い頭も火のやうな全身も疲れ果てた肉體も、一切が詩の中に溶けてゆくのである。全く無念無想の境地へ浸り得るのである。

お痛しくも御重體の身を御駕籠に横たへられ、炎熱下の重疊たる山岳を越へて、皇威を宣揚遊ばされた北白川宮の御姿が、そよりにうかゞわれてくる……

あゝ、その御姿を想ふとき、たかゞチブス位のことと、しかも一發の銃聲すらもないこの平和な山間の病舎に、あわてふためき、もがき悩んでゐた自分の愚さを、しみじみと情なくなつた。そしてふとも私は、此處へきて、なぜこの詩吟に氣づかなかつたかと思つた。

詩吟はどこでもうたへる。

病床でも、仕事の中でも、どんな場合でもうたへるのだ。

かなしいとき辛いとき詩吟をやれと青年達に教へてきた。

詩吟の精神はとりもなほさず日本精神の昂揚にあるのだから、吟じてゐるだけでも一切の雜念から救はれる。ひたすら天地の正大の氣にふれ、悠大な氣魄と臣民の情が、おのづからひらけてくると教へてきた。

逆徒には詩はない。

日本の詩は尊王の大義に生くる者の歌だ。

日本の詩は慨世憂國の血のほとばしりだ。

詩吟はその心を傳へる日本民族の逞しい音樂なのだ。

詩をうたへ！

詩を吟せしめよ！

詩の精神を生かせ！

私は青年たちへ教へてきた。

青年たちは、戦野に戦友たちを慰安激勵するために、陣中に士氣を鼓舞するために、詩を吟じ劍を舞つてゐる。

それであるのに、それを教へた自分が、すこしばかりの熱病にとつゝかれて、この民族の逞しい音樂、日本の歌の存在を忘れるとは何事だ！

こんなときにこそ詩に生きるべきだ。

逆境のときこそ詩にすがるべきだ。

詩のこゝろにおのれをうち込め！

私は明日からこの病室にゐる間は、どんなに苦しくとも口の中だけでも詩を吟ずることにした。二日ばかり立つて久保から便りがきた。それによると、請負師の方はうまく話がついて、私が



癒るまで待つてくれることになつたと云ふ。

私はいつになく晴れ晴れとした氣持になれた。氣がかりだつた母子寮が、自分がかうした境遇におかれてゐても、立派に完成されてゆくのだ、もし私が、ふつと此處で死んでも、あの仕事は完成される、チブス患者としてよし此處で終つたとしても、仕事は愛國の赤誠を傳へてくれるだらう……。

さう思ふと愉快だつた。今宵はいゝ月夜だ。寝てゐる私の全身へ、月光が限りなく降りそゞく私は月に向つて靜かに微吟した。岩崎行親先生の「國體篇」である。建國の大義を説き、臣民の道を教へる逞しい日本の歌である。

邈兮二千六百秋

日東肇國基神籌

國體之優風土美

宇內萬邦無匹儔

豐葦原之瑞穗國

是我子孫君臨域

行兮爾就而治之

寶祚天壤無窮極  
神訓炳乎如日星  
施之萬世民心寧  
三種神器教君道  
傳之無窮帝德馨  
我皇神孫無姓民  
日本爲家君父比  
億兆齊仰一家君  
義乃君臣情父子  
欲孝親者須忠君  
欲愛國者須尊君  
忠孝一致君國一  
我國憲法存古文  
嗚呼美哉日東君子國  
上下同心一其德



嗚呼優哉萬世一系君  
列聖相承垂功勳

篇中「親に孝ならんと欲する者は、須く君に忠なるべし、國を愛せんと欲する者は、須く君を尊ぶべし」此處までくると、おのづから涙の滲むのを覚える。あゝ、ろくでなしの私よ！この日本の歌を吟じきつて、いづこに身のおきどころがあらうか。月をあくまで清く私の心にしみ入るやうである。

## 同室の人々

セルの着物が送られる頃、私のからだもやうやく癒りかけてきた。どうやら便所へゆけるやうになつたし、お粥や果物の汁も喰べるやうになつた。そして間もなく、一號から五號へ移された。五號室は癒りかけた軽症患者のみを入れておく所謂大衆病室である。此處には五つの寢臺があり、雑然としてはゐるが、私は人里にでも出てきたやうな懐しさを覺えた。

讀書も許されたので、家から、安岡正篤先生の童心殘筆、ヒットラーの我が鬭争、日蓮一代記

大川博士の二千六百年史、常岡一郎氏の中心への道、齋藤瀏少將の惡童記、女教師の記録、父母の書、等の本をとりよせた。

この部屋へきて、私は同病の歸還兵と仲良くなつた。

彼と私とは隣り合せでゐたので、いつか親しく話合ふやうになつた。見るからに屈強な私より一つ歳下の男で、名前は佐藤由平と云つて商賣は樵夫だつた。

滿洲事變にも出征し今度の事變でも、四段抜きで書かれたこともある勇士だとわかつた。しかも白衣で還つて、この四月迄は病院通ひをしてゐるが、やうやく癒つて、仕事を始め出したとたん又私と同じやうな病氣にとつゝかれてしまつたのだつた。

彼は隣の寢臺から色んなことを話した。

彼は事變前は打つ買ふ飲むの三道楽といふ、途法もないやくざ者だつた。

それが還つてくるとすつかり眞面目になり、元の樵夫をやらうと心掛けた。三年も二人の子供を抱へて留守をまもつてゐた妻に、心から安心のゆく生活へ志した。

ところが、自分の周囲の友達が、事變直後の物資の變動をねらつて、しこたま金儲けをした姿をみた。一方では血みどろの戦争をしてゐるのに、彼らは事變を利用してすつかり田舎大盡になつてゐた。木材のブローカーをしたり、鐵や綿のブローカーをしたり、全く目先の利く奴は思ふ



さま物資の變動の虚を突いて私腹を肥したのである。

佐藤らが還つてきたときは、もうそうした勝手な金儲けは出来なかつた。さうした非國民的行動は國法が許さなかつた。個人から國家本位への經濟統制が布かれたのである。しかし、儲けた奴は既に超然として大盡振りを發揮してゐた。

「自分たちが生命がけでやつてゐる間に、彼奴らは國家の生血を吸ひとつたのだ」

かう考へると佐藤の腹の中が煮えくり返りさうになつてくるのだつた。

或時こんなことがあつた。金肥りした友人に、「俺たちが留守の間にうまくやりやがつたな……」と、云つた時、相手の男は、「いゝさ、お前らは官費でえゝところを見物してきたんだから……」

さう云つて佐藤をさげすむやうに見た。

「何つ！」

佐藤はこらへにこらへた怒りが一時に爆發した。

「生命がけで働いてきたのに、け……見物とは何んだ！」

ふつたうした怒りは、思はず傍らのナタを振り上げた。

相手の男は青くなつて平つくばつた。

留めるものがなかつたら、あの時、叩き殺してゐたかもしれないと佐藤は口惜しさうだつた。

それから佐藤の性格は又一變した。

酒と女郎買と賭博の生活へぐれ出した。

そして、このチブスにとつゝかれたことを物語つた。

「罰があたつたんでさあ、未だ残つてゐる戦友のことを思へば、いくらなんだつて、ぐれた根生なんか起しちやならねえのに、全くわしが馬鹿でしたよ……」

佐藤はポロポロ涙を流した。

にくむべきは佐藤をして、生活をぐれさせたところの、あの銃後を喰ふ毒蟲だつた。

私は佐藤に云つた。

「君の怒りは正しい、君の怒りは君一人の怒りではない。國民全體の怒りだ。振り上げたナタの中に國民の怒りがこもつてゐるのだ。しかし、その怒りをなぜ歪めてしまつたのか、正しい怒りを怒りとして、この國民の中へ行き渡るやうに努力しなかつたのか、君の村へ、君のゆく町へ、一人でもそんな非國民のないやうに正しい戦ひを起すべきだつた。獨逸がこの前の大戦に敗れたのは、獨逸に巢喰ふユダヤ民族たちの爲だ。彼らはゲルマン民族の血を吸ひとり、自分だけ焼け肥つて、敵國へ祖國を賣つた奴らだ、自分の利益のためには祖國も國家もないのだ。ヒットラー



は大獨逸建設のためには、その毒蟲たちを追つ拂つたではないか。そこにヒットラーの偉さがあ  
り獨逸の強さが生じてきたのだ。私たちの日本だつてさうだ。事變を喰ふ毒蟲たちを一掃しなけ  
ればならぬ。幸にも君たちは、僕たち以上に、國民として正しい怒りを發揮出来る人だ。僕たち  
は君達歸還兵こそが、あの生々しい經驗を生かして、國防國家建設への指導者となつてくれるこ  
とを希つてゐたのだ。それなのに君は、怒りをねちまげてしまつた。つまらなくグレたりなどし  
たが、しかし、これからでも頑張ればいゝぢやないか。一刻も早く癒つて、お互に御奉公しよ  
うぢやないか……」

佐藤は涙ぐんで聞いてゐるが、

「佐藤にはあなたの話が解ります。これからさう致します……」

軍隊口調で彼はさう云つた。

うれしい愛すべき男である。

佐藤は暇さへあると、戦線の話をしてくれた。昭和十二年九月から中支北支に轉戦すること丸  
三年、十五年二月に歸還したばかりである。従つて、その話の豊富なことは驚くばかりである。

戦友との死別の話になると、さすがに涙ぐんだ。そして、その哀しみを、毒蟲たちへの怒りに  
代へた。

院長始め看護婦たちにも彼は愛された。

全く素朴な山男であるからだ。

この部屋へきてから、私は毎日を愉快に暮らすことが出来た。からだも順調になつてゆくし、  
時折やつてくる妻へも餘り来なくてもいゝやうに云つてやつた。獨りでも充分頑張つてゆけるだ  
けの氣力になつてゐた。

佐藤の向ふ側の寢臺に、年の頃は卅歳位で、よく看護婦とべらべら喋つてゐる男がゐた。小柄  
で、何か暗いかげをもつてゐるやうな感じの男で、ぎよつとした眼付が特調だつた。

附添人はなかつたが、時折刑事らしい男が見廻りにやつてきた。そして、ふとしたことから、  
彼は婦女誘拐詐欺窃盜前科九犯と云ふ異常なる代物であることが判明した。

名前は忠さんと呼んだ。

この忠さんとも私は親しくなつた。

忠さんは自分の前科をかくさうともしなかつた。

面白可笑しくその犯罪を告白しては皆を笑はせた。

しかし、その話は非常に考へされる部面を持つてゐた。

最初はほんの僅かな犯罪から、一步一步と深みへ入つてゆく経路には、やはり社會の愛情の缺



除が大きい影響を與へてゐた。一回の犯罪で、それきり更生しようとして、社會が容れなかつたために、自暴自棄的に第二の犯罪へ入つて行つた忠さんだつた。勿論、本人の意志の薄弱さにもよるが、かうした人間だけに深い社會愛が必要だつた。

この病室にゐても、忠さんはまことに危険な岐路に立つてゐることが解つた。忠さんの話によると、彼は出獄して間もない身であつた。

この七月出獄してみると、思ひがけなく故郷の村長さんが一つの位牌をもつて出迎へにきてゐた。

そこで始めて、自分が服役してゐる間に、中風の父を養つてゐるとばつかり思つてゐた弟が、北支で戦死したことが解つた。お上からの御下賜金は役場で預つて、村人たちが代る代る父の面倒を見てゐてくれることが解つた。

そのときばかりは、さすがに忠さんも泣いて更生を契つた。

心から父を養つて生面目に働く氣になつた。

村役場の情で、自轉車やリヤカーを仕入れて、町へ野菜や果物の行商をやるようになった。しかし、彼を一番かなしませたのは、折角自分では眞面目になつたつもりでも、村の心ない人々の眼は彼に冷たく厳しかつた。

挨拶しても返事しない者もゐた。

前科がいつも禍するのである。その一犯二犯も犯罪としては輕微であり、みんな刑期の短いものであるが、人は彼を大悪黨として見た。

それでも、餘程彼は只一人の弟の戦死に發奮したのか、何もかもじつところへた。村長や助役や駐在所に勵されながら今日迄眞面目に働いてきた。

それが最近こんなことがあつた。

忠さんがこの町へ自轉車の修繕を頼みに寄つた其の自轉車屋の女房が、思ひがけなくも、昔彼が誘拐した女だつた。

今、彼は平氣だつたが女は顛倒せんばかりに青くなつた。何か脅迫にでも來たやうに思つた。

忠さんが修繕を待つてゐる間に、女は見知りの警官を連れてきた。ところが、又その警官に二三回も檢査された彼だけに、有無も云はせず警察へ連れて來られたが、村長たちの證明で無事釋放されたといふ事件があつた。そして間もなく、赤痢で此處へ入院してきたのだつた。

「折角人が眞面目にやつてるのに、馬鹿にしてやがる……そんなに何時迄も疑つてゐるなら、もう一べん暴れてやるから……」

彼は口惜しさうに云つた。



「それやいけない……」

私は静かに云つた。

「何も悪いことしてゐないのに、そんなことをされたら怒るのが尤もかもしれないけれど、そこをじつと我慢することだ。佐藤君もよく聞いてくれよ。僕だつて、君たちに意見らしいことを云ふ資格はないが、僕の話として聞いてくれ、忠さんと立場こそちがへ、僕はその昔思想運動をやつた人間だ。丁度轉向して十年立つ、その間、未だ運動をやつてやしないかと随分疑はれたものだ。自分では正しく歩いてきたと思つても、人様から見れば間違つてゐることもある。僕も十年の道は棘の道だつた。君のやうに前科こそ無くとも、政治運動は直接國家關係が深いから、その取締りは嚴重なものだ。しかし、私はじつと歩いてきた。今日始めて多少とも信用を得られるやうになつたのだ。そして、現在僕が活動中の遺家族の家を建つ仕事も、十年の忍従の道の上で始めてなされようとするのだ。又さう云ふ仕事をすることが、本當の生きた轉向の姿だと思ふ。どうせ人生は目開き千人盲人だ。人の云ふことなどより、自分が正しく生きるといふ信念さへ持つてゐれば、恐るゝ何者もないぢやないか。忠さん、考へるところは此處だ。君が出獄して二ヶ月しか立つてゐないのに、自分だけが正しいと思つても、世間が承知しない。信用なんかしない、と云つて元へ返る必要はない。先づ信用を得る迄じつとこらへて働くことだ。それも普

通りでは駄目だ。彼奴は變つたと思ふ位のことをやつてみる、しかも一年や二年では駄目だ。君の村の神社の境内を毎朝掃くとか、村の墓場の掃除は、君一人で引受けるとか、さうしたことをやつてみる、働きながらその餘暇に自分で出来る範圍の公益をやることだ。又何をするにも村の重だつた人たちや駐在所と相談してみるんだ。いゝことには誰れだつて反對する者はない。そこで始めて誰れにも疑はれない立派な忠さんが出来るんだ。こればかりのことではヤケを起すことではない。自分を責めることだ。何もかもじつとこらへて、正しい仕事で人の信用を得ることだ。疑る奴は大臣のことだつて大將のことだつて悪く云ふんだから、自分さへ正しい仕事をしてゐれば恐るゝことはない。きつと信用してくれる人も出てくる。一人づゝ信用してくれる者が出来れば、最後には大きな力となつてくる。なあ忠さん、こゝで變な量見を越しちや駄目だぞ。又戦死した弟の名譽にもすまないぞ……」

忠さんはほろほろ泣き出した。前科九犯の忠さんも、一皮むけば實にいちらしい男であつた。

忠さんは常岡一郎氏の「中心への道」の本が氣に入つたと見えて、暇さへあると讀むやうになつた。又妻が送つてくれた小雑誌「中心」を三冊ばかり忠さんに差上げた。

内容がかなり深く忠さんに觸れたらしい。忠さんは押し頂くやうにして云つた。

「下川さん、わしは今度こそ眞面目になりますよ。歸つたら記念にこの「中心」を額にしておきま



す……」

うれしい言葉である。

それから間もなく、軽症だったと見えて忠さんの退院する日がきた。

「色々御世話になりました。からだ大事にしなければよ」

忠さんは幾度も頭を下げて出て行つた。

私たちは、窓硝子を透して、門を出て行く忠さんの後姿を何時までも見送つた。

村人二三と連れ立つて、風呂敷包みをつる下げて、飄々乎として出て行つた忠さん……

「しつかりやつてくれ忠さん……」

私は佐藤と共に心から多幸な彼の前途を祈つた。

忠さんが去つた後、この廣い部屋は私たち二人きりになつてしまつた。しかし、それも束の間で、又軽症な赤痢患者が忠さんの後へ入つてきた。

町の有力者か何からしく、恐ろしく附添人の多い患者で、ひつきり無しに見舞客がきてゐた。彼らは私たちにかまわず話はみんな金儲けの話である。しかも、大きな闇でもやつた連中らしく話の中に罰金が高いとか安いとか、盛んにやつてゐる。

「自分の金で自分が儲けるに何が悪い」

「安く仕入れて高く賣るのは商人の腕だ」

「昔はみんなさうして身代をつくつてきたぢやないか」

彼らは口々に自分の行動を正當化してゐる。

いつか私たちとも口を聞くやうになつた彼らは、

「あんた方はどう思ふね？」

と、話かけてきた。

今迄彼らの金儲けの話や闇取引のことで、むかついてゐた佐藤は、

「どうもかうもありやしないよ。一方ぢや生命がけで戦争してゐるといふのに、あんまりお前さんたちはひど過ぎるよ」

佐藤　ぶつきら棒に答へた。

「ひど過ぎるつてどこが？」

相手はからんできた。

「さうぢやないか、俺も戦地へ行つてきたが、戦地のみんなは、一人だつてお前さんたちのやうな人間が、銃後でぼろい儲けをしてゐると思つちやゐない。誰れも彼れもが俺たちと同んなじやうに働いてくれてゐると思つてゐる。それを、自分勝手な眞似をして何んだと思つてゐるんだ



……」

佐藤は寝臺の上に起き上つて興奮して云つた。

「ふーふー、それやお互さま、あんだだつて、私たちと同じ境遇にゐれや、きつと金儲けをやりますよ、金儲けは金儲けですよ。高い買手があつたから儲けたまでだ、それを罰するなんて、どうかしてゐる。元祖の紀之國屋文左衛門が泣きまさら……」

彼らは吐き出すやうに云ふ。

この新入りの患者とそれをとる巻く人々は、骨の随まで自由主義時代の匂ひがこびりついているらしい。

私は黙つて聞いてゐたが、丁度紀之國屋文左衛門の名が出たので、これによつて少しばかり彼らの昔の夢を叩きつぶしてやらうと思つた。

そこで私は話出した。

「今元祖の紀之國屋文左衛門が泣くと云つたが、あんな奴は今なら國賊で死刑もんですよ……」  
私は極端に云つてみた。

「えつ、死刑？ ど、どうしてよす」

案の條、彼らは疊みかけて訊いてきた。

「さうですよ。昔ならあれで通つたでせう。しかし、昔でも私に云はしめれば大馬鹿野郎です。なる程、生命がけで蜜柑を江戸へ持つてきて、江戸市民をうるほしたのは偉いが、それを法外に高く賣つて金儲けしたのでは何んにもならない。紀文と云ふ男一人の利益になつただけだ。それも江戸市民の一部だけが食べられただけで、多くの者は指を銜はへて見てゐたではないか、さうなると、彼の必死の行動は自己主義以外の何者でもない。米の買占めした、増買と五十歩百歩だ。あれを、必死で江戸へ持つてきて、通り相場で、損のゆかぬ程度で、一般の江戸市民をうるほわしたなら、どんな時代がきても商人の神様として仰がれるが、あれちや自分の利益以外には何もものもないと云ふ遣り方は結局國家も同胞もないと云ふことになる。これが蜜柑でなくとも米だつたらどうなる。自分さへ金が儲ければ、その高い米を買へなくて飢死する者があつてもかまわなると云ふことになるぢやありませんか。實にけしからんことだ。かう云ふ男が事變や戦争には出てくるものです。物資が敵性國から輸入されなくなつたり、戦争へ振り向けられたりすると、品不足となる。そこでそれを高くても買ふと云ふ者が出てくる。賣手は一般に配給したり政府へ買上げられると儲けが少くないので、生産をゴマかしたり隠匿したりしてこれを闇値段で一部の者へ賣るのです。これをその儘にしておいたらどうなるか？ 生産者も商人も値の高い方へ、儲る方



へ物資を賣つてしまふ。買ふ方も餘裕のある者でなければ買へないから、一部の者だけがそれを消費し専有するようになる、さうなると、不正な者だけの片寄つた國家が出来てしまふ。一方的な景氣が出てくる。そこで國家はどうなるか、國民はどうなるか、考へてくれば解るでせう。戰爭へ振り向けらるべき物資を横取りしたことになる。同時に、國民の生活を脅かすやうなことになる、戰爭への生産も勢ひ不活潑になり、變な考へを起す者も出てくるぢやありませんか。例へばガソリンの生産會社が、政府へ收めるべきガソリンをゴマかして、値段の良いところへ賣つたらどうなりますか。飛行機も戦車も戦艦がにぶります。次ぎにくるものは敗戦ぢやありませんか。會社が備かつても國家が敗戦したら何んにもなりません。國家あつての會社で、會社あつての國家ぢやないのですか。あなた方あつての國家ではなく、國家あつて始めてあなた方も生きてゐられるのです。個人本位ですべてを考へ勝手な行動することは、最も恐るべきことですよ。すべての考へを戰爭に勝つべく置かなければなりません。その爲に經濟統制が行はれたのです。すべての物資を國防國家建設のために配給する、第一を戦線へ、第二を銃後へ、そして第二がどんなに少い配給であつても分け合つてこらへなければならぬのです。戰爭に勝つためです。それを自分の利益だけ考へて物資を左右する者があるとすると、立派な國賊です。しかし、いくら口をすつぱく云つても解らない者があるので、罰するやうになつたのです。一體法律をつくらなければ

それを止めないなんて、實に日本の恥辱ではないでせうか。解りますか。あなた方もどんな闇取引をやつたかもしれませんが、それだけ日本の戦闘力をにぶらしてゐるのです。戰爭と經濟統制は兄弟です。今では經濟統制が完全になされてゐる國ほど強いのです。それであるのにあなた方は、あの統制を亂すばかりでなく、政府のやり方を責めるなんて、實にけしからんです。まあ國賊ですな……」

私は熱するまゝに喋り續けた。

未だ云ひ足りないやうな氣がしたが、適當な言葉が出て來ないのでやめた。

「へえ、そんなもんですかねえ……」

闇の患者たちは、それきり何も云はなくなつたが、それから私や佐藤に妙に白々しい態度になつて行つた。

さうして、いつか私たちを残して彼らは病室を變へてしまつた。

「馬鹿な人たちねえ？」

看護婦たちまでが彼らを輕蔑して笑つた。

私たちが、こんな病室會談に時を移してゐる頃、地球の一角には大きな嵐がはらんできた。



皇軍の佛印進駐——

日獨伊の軍事同盟が傳へられた。

あゝ、新しい世紀の鐘が鳴る……

## 記念祭前後

朝夕がめつきり寒くなつた。

壁の陽ざしが次第に移り變つてきた。

すでに私たちは、此處へきて二ヶ月近くなる。髯も蓬々と生え、全くの山男然となつてしまつた。しかし、次第にからだの方は健康になつてゆくのに、チブス菌が仲々とれたかつた。佐藤も同様だつた。

しびれをきらした佐藤は、

「もう一度戦地へゆきたいなあ……」

そんなことばかり云つてゐた。

外が戀しくなると、窓をひらいて、ふんふん……と鼻を鳴らしては外の空気を吸つたりした。

「あゝ、子供たちが何かやつてゐる……」

さう云つてはどこかを凝視してゐることもある。外の子供たちの姿の中に自分の子供たちを思ひ出してゐるのだらう。

とき折くる彼の妻君も此處へは子供を連れて來なかつた。それだけに又子供が戀しいのであらう。私だつておんなじである。佐藤同様、外が戀しい。子供に逢ひたい。しかし、一人のときはともかく、二人となると餘り身苦しい眞似はいやだつた。じつと落着いてゐたかつた。

それに今更じたばたしたつてどうにもならないのだ。

風まかせ波まかせ、たゞ自分の針路さへ見極めてゐればそれでいゝのだと思つた。

それに母子寮の工事が續行されてゐるといふ便りが一番私の氣を強くした。

或る日、森一平が面會にきた。

彼の口から意外なことを聞いた。

それによると、私がしばらく故郷へ歸らない留守の間に、妙な噂がひろがつてゐるといふことだつた。



「世間なんて全くデタラめなものだよ。君のかう云ふ苦しきも知らないで、くだらない逆宣傳をして歩くんだ。丸で君が、母子寮の建設運動なんか表面の理由で、蔭では昔の運動でもやつて、今ひとつかまつてゐるんだとか、見てきたやうなことを云つて歩くんだ。又存外世間ぢやそんなことを眞に受けるもんだよ。それに變な羨望と云ふか、君の成功をねたんでゐた奴が、鬼の首でも取つたやうに逆宣傳をしてゐる。僕は人ごとでも腹が立つて仕様がな。君の永い間の苦勞を知つてゐるだけに、あまりにも君が可哀さうだ……」

彼は口惜しさうに唇を噛んだ。

「しかし、さつき院長さんに逢つて聞いたら、菌がとれさへすればいゝと云ふ話だから、もう長いことはないよ、充分こゝで修養してくるさ、出てきたら、うるさい世間なんか蹴つ飛ばして頑張りやいゝ。世間は世間、僕は僕らだ。決して心配することはない。元氣でゐてくれ……」

さう云つて歸つて行つた。

ほろ苦い人生に温い友情が身にしみる。

世間は世間、僕は僕らだ、何んと云ふうれしい言葉だらう。

全く世間なんて森一平の云ふ通りかもしれない。

盛んなときは見知らぬ人間でも寄つてくるが、一敗地にまみれると、身近かな者でも横を向い

てしまふ。そればかりか、寄つてたかつて其の缺點をあげ出して、二度と立ち得なくしてしまふ、さうした事實をよく私は知つてゐるのだ。

私たちがかりぢやない。

大臣だつてさうだ。大臣になつたときは四方八方から英雄に祭り上げられる。當り前のことも逸話なんかと書きたてる、それが一寸でも躓くと、口をそろへて攻撃する、躓づきを勞り合つて、より以上の人物にしようとはしない。昨日の逸話も今日の過失に轉落されてしまふ。それぢや伸びる脊はない。大きな人物や秀れた人間は出來つこないのである。

一生を國事に捧げた將軍や政治家が、わずかな躓づきやその時の情勢によつて、世間から葬られた事實は澤山ある。ましてや、根も葉もないことが、事實として傳へられ一生を棒に振つた人さへある。そして世間は根も葉もないことも、「火の無いところに煙は立たぬ」と云ふ愚劣な諺で逆宣傳をするのである。

煙は火のあるところばかりから立つのではない。火の無いところに放火犯人のひそんでゐることも忘れてはならないのだ。

個人の生活ばかりぢやない。政治も外交も、すべて近代戦に於てはこのデマの放火犯人が如何に恐るべきかを知らなければならぬ。支那のデマ放送が、どんなに眞實らしく、英米人を動か



し、援將の武器となつたか？

この前の大戦では獨逸はこのデマに敗北した。

恐るべきデマ放送……心なき人々……

かなしむべき世間である。しかし、これが世間の全部ではない。是は是とし非は非とする本當の世間が日本にある筈だ。

母子寮建設當時のめぐり逢つた人々の熱い心を想へば、人生は限りなく深い、私はそれを求めそこに生きてゆけばいいのだ。そこから、心なき人々へ、恐るべきデマへ、黙々と仕事によつて闘つてゆけばいいのだ。あたかも、蔣一派のデマや英米の心なき仕打を相手とせず、たゞ黙々と大東亞建設へ進む日本のやうに。

かう考へてくると、森一平の殘して行つた、故郷の私への聲も恐るゝに足らないと思つた。

「云ふ者には云はしておけ。われはわれの道を歩め！」

私は強く自分を鞭打つた。

東京から日新聞社の小宮正海君が、妻の案内で見舞にきてくれた。

「ほう、仲々元氣ぢやないか。肥つたぞ。これぢや死ぬつたつて死ぬないや。たまにやかう云ふところへきた方が、人間にハクがついていゝよ……」

相變らずのんきな小宮君である。東京からはるばるやつてくる友情が何より嬉しい。

妻は森一平の云つたやうな、世間の心なき噂や、その冷めたをかこつてゐた。

「貴方の變な噂が立ちますと、毎日のやうに電話をかけてくれた人でさへ、途中で逢つても横を向いてゆきますよ」

口惜しさうだつた。

世間の色々な噂の中に、どんなに妻が肩身をせまくして、活動してゐるのかと思ふと、痛々しく見えてならなかつた。

二人が歸つたあと、私は一刻も早く此處を出なければならぬと思つた。噂を氣にするわけではなかつたが、折角順調に進んでゐる工事が、そんな噂のために邪魔されてはならないと思つたからだ。

私は院長にきて貰つた。

院長は、

「あなたはチブス保菌者になつてゐるんです。これになると随分長くかゝる人もありますが、しかし、私の豫想ではまあ十一月の記念祭までには何んとか出られるやうになれると思ひます。精々つとめて見ませう」



院長は、私の立場をよく解つてくれて、同情するやうに云つてくれた。

「愈々歸れるぞ……」

私の胸は嬉しさにおどつた。

二千六百年の記念祭には間に合ふやうに歸へされる……

私はそれを願つてゐたのだ。

どんなことをしても、あの記念祭だけは家で迎へたいと思ひつゞけてゐたのだ、それだけに、院長が記念祭までには歸れると云つた言葉が、私には何よりも力強く響いたのである。

記念祭の日が近づいてくる。

二千六百年の記念の奉祝歌が遠くから聞えてくる。祭りの準備の笛や太鼓の音が、夜毎に遅くまで響いてくるやうになつた。

記念祭がくる！

記念祭がくる!!

私は記念祭の日を指折り數へた。

さうした頃、突然、市保護観察所の池田書記が面會にきてくれた。私と同年輩の體の大きい世話好きな人だつた。

池田さんは、私がこの病院を出たときの心構へについて話にきたと云つてゐた。

やはり森一平の云つた通り、世間が何もわかりもせず、色んなことを云つてゐる人もあるから、此處を出て行つて、そんな聲にぶつかると、淋しい思ひや辛いことになるから、その點を充分考慮に入れて、どんなことがあつても、じつと我慢するやうにと云つてくれた。

「君のやうに勇敢に頑張る者は、それだけ又目に見えぬ敵もつくるといふことを知つておく方がいい……」

と、附加へて注意してくれた。

そのとき、池田さんから、私の留守の間に、母子寮建設に協力して頂いた戸波保護司が、東京に轉任になつたことを聞かされた。

池田さんは夜遅く迄私を慰安して歸つて行つた。

池田さんが歸つたあと、しみじみと世間のくだらなさを考へると情なくなつた。

自分のやうなちつぽけな人間をデマつてどうなるのだ……結局さう云ふ人たちは、私にあの建設される母子寮をやらしたくないのだらう……そんなにも考へた。

しかし、何んと云つても私が一刻も早く歸ることが先決問題である。

さうした間に記念祭は近づいた。



私は毎夜歸される日の夢を見た。

あの二千六百年の佳き日を、我が家で迎へることの幸福に酔つた。  
私の全身は歡喜に震へた。

父母の顔……

妻の顔……

子供たちの顔……が、丸で走馬燈のやうに腦裏をかけめぐつた。

しかし、悲しいことには私の齒は仲々とれなかつた。

院長も心配してくれてはゐるが、こればかりはどうにもならなかつた。

私はあせつた。私はもがいた。

日本人として、建國以來二度とめぐり合はない記念祭を、こんなところで迎へたくなかつた。  
一家そろつて明るい太陽の下に臣民として迎へたかつた。

あゝ、しかし、ついにその前夜まできてしまつた。

昭和十五年十一月九日の夜だ――

明日の記念祭を控へて、この小さなK町も、祭り囃子のルツボと化してしまつた。

壁を通し窓を通し、祭りの唄は昂つてゆく……。

全國津々浦々迄心から皇國の御代を壽ぐ明日の記念祭を、私たちはこんな隔離舎の一隅で迎へなければならぬのか……哀れなチブス保菌者として……。

「佐藤君！」

私は佐藤を呼んだ。

佐藤も又同じチブス保菌者として、明日の榮えある世紀の祝典に出られないのだ。

その佐藤も蒲團の中で泣いてゐた。

「あゝ、残念だ……」

私は蒲團にしがみついた。

かなしさが一べんにこみ上げてきた。

瀧のやうに涙が顔中へ流れに流れた。

ついに記念祭の日がきた。

日本歴史のこよなきよるこびの日だ。

建國二千六百年を心から壽ぐ國民の日だ。

日本の隅々までが、よろこびの歌に満ち溢れる日だ。



あゝ其の日を、ついに病床に迎へてしまつた。しかも、この避病院の一室で。國民として何んといふ悲しさだらう。

泣いても返らぬ日だ。

再びめぐつては来ない今日の日だ。

朝早くから囃子が聞こえてくる。

一夜まんじりと眠れなかつた私は、うつろな眼で、空を見上げた。

深く澄んだ空……

陽の光りの限りなくあたゝかな佳き日だ。

この佳き日を、私は此處で過さねばならぬ。

「こんなことなら戦地で死んだ方がいゝ……」

佐藤も又國民としての思ひに哭く。

看護婦の話では、午前十時を期して、ラヂオを通して、近衛總理大臣の發聲で、一億同胞の空

壽萬歳の唱和があると云ふことだつた。

せめて、私たちはそれへ参加することにした。

この病院では、十時近くになると、職員全體が、私たちの窓近い庭に整列した。

事務所のラヂオが今日、大きく鳴つてゐる。

私と佐藤は、病室の窓を開けてベットの前に整列した。

近衛公の烈々たる祝詞が聞こえる。私は眼をつぶつてそれに聞き入つた。聞きつゝわけもなく

涙が流れてきた。

十時――

「天皇陛下萬歳！」

あゝ、近衛公の一聲……

思はず私たちの手も上つた。

この病院全體が、いや町全體が、野を越え山を越え海を越へての日本全體が、今こそ、この萬歳に結合されたときなのだ。一億一心が勝利へ向つて結ばれたのだ。

何んといふ感激の一と時だらう。

「下川さん……」

佐藤は私の手を結つた。

「わしは此處を出たら頑張ります……」

「うむ……」



「今日のこの萬歳は、わしの心をあの戦場にゐたときのやうな氣持にさしてくれました。下川さん、あんたもくだらぬことを考へずに、此處を出たらうんと御奉公ませう……」  
此頃の私の身邊をめぐつての事柄を佐藤は知つてゐるので、さう云つて私を勵し、自分の決意を訴へた。

「さうだ、お互に頑張らう。今日のこの十時の萬歳を記念として……」

ぐつと結びしめる手と手に、大らかな朝の太陽が、さんさんと降りそぐ。

あゝ、再びめぐり來ぬ二千六百年の記念祭よ!!

「この日の感激を忘るべからず!!」

## 晩秋挽歌

靜かな日が続く。

日向の戀しい頃になつてきた。

朝の九時から正午までの一と時、窓の端から壁へかけて陽が流れてくる。

私たちはその僅かな日向を楽しんだ。

裸になつて、背中や胸を干したりした。移動してゆく陽かげに添つて私たちも動いてゆく。そして、陽かげが壁高く上つてゆくと何時も正午の笛が鳴つた。

私たちはその陽かげの高さによつて正午迄の時間を計つた。

「いくつ數へたら正午になるか？」

佐藤と二人して子供らしく賭けを始める。

窓先へ雀がくるようになつた。

前の庭の立木へ雀たちは遊びにくるらしい。ついでに、私たちの所へも訪づれてくれるのだ。じつと凝視してゐると、何んの屈託もなく彼らは囀つてゐる。

たのしさうな姿だ。

それを見てゐると私たち迄がのんきな氣持になれた。

そして、今日は雀がくるか來ないかと、二人で又賭けを始める。

どうやら二人とも、この佗しい病室を、楽しい我家と思ふやうになつた。

送つてきた雑誌から、風景畫の口繪をとつて壁にはつたりした。

一寸書濟らしい氣分が出てきた。



本も此頃やうやく頭に入るやうに讀めた。

ヒットラーの我が國争や日蓮一代記などは、今の私には一番びんときた。

英雄の波瀾にとんだ生涯は、今の私を慰めるに充分だつた。

彼らはみんな偉大なるロマンチストである。

しかし、生れながら偉大であつたわけではない。

一介の兵卒だつたヒットラー、漁師の小倅であつた日蓮すべてが路傍の石塊に等しい存在だつた。それが世界の英雄となるのも救世主となるのも、その周囲の情勢と、卓抜した信念が、今日の彼らを築いてゐるのだ。

敗戦後の疲弊しきつた獨逸は、ヒットラー一兵卒を立たしめた。糜爛し腐廢しきつた鎌倉政治の中に日蓮は立上つた。そこには微塵の私心はない。あるものは不動の信念即ち二人とも愛國の赤誠の権化だつた。

困苦は彼らを磨き上げ、壓迫は彼らに逞しい氣魄を與へた。愛國の旗をかざすところ、そこには恐るゝ何ものもなかつた。死が彼らを避けて行つた。あらゆる國争は正しい理想の實現にあつた。日蓮は不朽の建國精神を後世に残し、ヒットラーは民族の解放に身をさらしてゐる。

私はこの二人の傳記を讀んで大きな力を與へられた。

秋晩の靜かな心の中に、二つの精神が私をしつかと捕へてくれた。

二人の英雄の苦闘史は、ちつぽけな私といふ人間を、思ふさま鞭打つてくれた。

靜かな氣持、澄んだこゝろで、神の裁きを待つやうになつた。

私は子供に手紙を書いた。

光夫よ！

お前たちと別れてもう三月あまり

人一倍お父さん好きなお前が

どんなさみしい心でゐるか

それを思ふとお父うさんは辛い

お母さんの話によると

あの記念祭の日にも

お前は外へ出なかつたといふ

「お父うさんも見られないから、僕も見ないんだ」と



お父うさんは嬉しくて泣いた  
しかし、そんな心配はしないでおくれ  
お父うさんはみんなの親切で  
日毎に快くなつてゆく……  
お前のところへ歸るのももう直きだ  
お前も知つての通り  
今のお父うさんは  
正しい道を歩んでゐる  
立派な日本人として  
母子寮をつくるために闘つてきた  
だから神様だつて  
一日も早くお前のところへ  
お父うさんを歸してくれるだらう……

この病氣だつて

神様がお父うさんをお試めしになつたのだ  
病氣なんかで  
くちけるお父うさんかどうか  
神様がわざわざ病氣を授けたんだ  
しかし、お父うさんは負けないぞ  
お父うさんはびくともしない  
病氣なんかハネ返して  
お前のところへ歸つてゆく  
母子寮の姿を見にゆくぞ  
もうずこしだ  
光夫よ!!  
さみしくなつたら  
お父うさんの寫眞を机に飾つて  
それをじつと見てゐて御覽  
お父うさんは何時も笑つて



お前の勉強を見守つてゐる。

英枝もお父うさんに逢ひたいと云つたら

その寫眞を見せてお上げ……

では、おちいさん、おばあさんや

お母ちゃんの云ふことをきいて

一生懸命に勉強するやうに

この手紙に折返して、妻から便りがきた。

それによると、自分の手紙をとりまいて、家中がみんな泣いたと書いてあつた。

一番嬉しかつたのは遂に母子寮が完成したと云ふ知らせだつた。も一つは今迄知らなかつたが、妊娠五ヶ月の妻の身であることだつた。その身をもつて、よくぞ今迄闘ひつゞけてきてくれたと、妻に對する新らたなる感謝の念がわいた。

そして、この二千六百年の記念に、陛下の赤子と母子寮をこの日本に捧げることを無常の喜びとした。

たゞ、便りの後尾にこんなことが書いてあつたのが不快だつた。それは自分が記念祭迄に歸ら

れなかつたことが、又一つのデマの材料となつて、母子寮をとり巻いて色んな噂が飛んでゐるといふことだつた。

私はそれを黙殺した。

それが世間の常と思へば腹も立たないが、考へるだけでも、折角落着いた心を亂されるやうでいやだつた。

さうした時、突然、義兄が面會にきた。

その話によると、誰れかあの母子寮をやりたい人があつて、私の留守の間に、色んなケチをつけて、私に手を引かせやうとしてゐるのだと云つた。そして、あまり面倒くさいから、一層のと縣の方へ捧げてしまつたら如何？ と云つた。

私は誰れがこれを経営しても結局目的は同じだから、

「いゝやうにして下さい……」

と、返事してやつたが、たまたまなくさみしかつた。

「ひどい奴があるものですね……」

傍で佐藤は自分のことのやうに憤慨した。

「人が苦勞して建つたものを、かうした災難に逢つてゐる間に、横取りしやうなんて、日本人



の風上にも置けない奴だ……」

吐き出すやうに云ふ。

「いや、そんなことも本當のことかどうか知らないよ、しかし、不愉快な話だなあ……」

事實私はこの話に觸れるのさへ憂鬱を感じ出した。

晩秋の風が荒々しく窓をよぎる日だった。

思ひがけなく父が面會にきた。

めつきりやつれた父を見たとき、私は聲もなくうなだれた。

父は眼をしばたいてゐた。

「からだはどうだ……」

と、先づ聞いてくれた。

それからぼつりぼつり母子寮の問題について話合つた。

ふとしたことから出たであらう噂が、こんなに迄大きな響きを與へるとは思はれなかつた。

そして父でさへ、あまり世間の噂がうるさいから、私が歸つても、その經營がやりにくいから、義兄の云ふ通り縣の方へ捧げてしまつた方がいゝ、と云ふのだった。

しかし、その顔には、ありありと手鹽にかけた俵を他人にやるやうな淋しさが溢れてゐた。

その話の中へ、丁度院長が見廻つてきた。

院長はこの話を聞くと。

「そんな馬鹿なことはない、そんなことを云ふ奴はよく調べて、警察へひつ張つて貰つたらいい、それぢやあんまり下川君が可愛想そうだ、折角苦心して建てたものを、此處へきて捨てるのは、誰れの逆宣傳かshれないが實にひどい、お父つあんもそんなことで負けちや駄目だ、下川君もそうだ、そんなこと位で人手に渡すなんて考へでなしに、あく迄その仕事をやり遂げるべきだ……」

院長は義憤に燃えてゐた。

「ありがたう御座います、私もそうは思ひますが……何分これが何時癒るかわからないので、つい面倒くさくなりました……」

父は院長の言葉に早くも老の眼に涙を一杯ためてゐた。

私はじつと黙つてゐたが、きつぱりと。

「お父さん、色々心配かけてすみません、今院長さんのおつしやる通り僕はあく迄頑張りますから、それ迄御苦勞でも我慢して下さい、先達義兄さんがきたときは、僕はあゝは返事をしてやつたものゝ、縣の方でも事の真相を聞いたら、きつと同情してくれると思つたのです、しかし、



院長さのお言葉の通り、僕は最後まで建設者として頑張らなければならぬ義務があります。世間が何んと云ふと、僕が歸る迄母子寮を守つてゐて下さい』と、父に云つた。

「うむ……うむ……」

うなづきつゝ父は晴れやかな顔になつた。

「下川君ももう直きですよ……」

歸りかゝつた父へ院長は優しく聲をかけた。

窓越しにじつと見てゐると、さうさうと吹き過ぎてゆく秋風の中へ、父は老ひの肩を落して、とぼとぼと歩んで行つた。

秋風へ

肩落しゆく

老父かな

秋が逝く。

秋が昏れてゆく。

すでに十二月、落莫たる風景があたりを包むやうになつてきた。風のうなりの佗しさ、陽のいろのはかなさ、病室の前の庭の、千草も枯れてしまつた。

しかし、この風景の中に世界の情勢はぐんぐんと變つて行つた。

獨伊の巨歩は歐州新秩序の建設へ、日本は南方を睥睨し、重慶の要點を叩きつぶして、ひたすら國家總力戦への態勢をとつた。

新體制の運動は活潑になつた。

さうした中に、私の佗しい生活の中へ、つぎつぎに嬉しい訪れがきた。

叔父の櫻井が、縣下詩吟聯盟の結成準備を傳へてきた。

私が歸つてからその發會式をやるよと云ふ知らせだつた。

又東寶映畫の一松素直さんが、在京中の口約束を固く守つて、母子寮落成のポスターを一千枚レイト本舗から廣告とつて作成し、妻宛送つてくれた。

一番感激したことは、淋しい家庭へ、吉田先生が、追加寄附として「一千圓」送つて下さつたことだ。その蔭には、小橋直人君の友情がこめられてゐるに違ひなかつた。

落ちぶれて

袖に涙のかゝる時



入のこゝろの

奥ぞ知らるゝ。

秋風落莫たる底に知る人情味は、私を限りなく勞り激勵した。

私のこゝろは益々奮ひ起つてきた。

不屈の氣魄が私の體内に脈打つた。

そして、ゆくりなくも、軍人會館での千田部隊長の激勵の言葉が又よみがへつてきた。

「あらゆる仕事には萬苦萬難がある

山もあり川もあり嵐もくる

そんな時にくちけては駄目だ

最後までやり遂げてこそ

日本男子の本懐である……」

あゝこれも人生の嵐の一つであつたのだ。

この嵐を超へてゆくものゝ上にこそ最後の勝利はやつてくる、まして、今の自分は正しい仕事に挺身してゐるのだ。何萬人の見えない敵がやうと、憎悪と罵倒の中に身を置かれやうと、恐るゝ何者もないと思つた。一度よみかへつた魂が、皇民として生きることには、はゞかる何ものも

ないではないか!

「千萬人といえど我ゆかん」

誰やらの言葉が湧いてきた。

さうだ、千萬人といえど我れゆかんである。

逝く秋の、昏れゆく空へ、私はこの言葉を、力強く送り出したのだつた。

## 歎びの日

私と共に佐藤の菌も容易にとれなかつた。

病院の中では、いつか私のことが噂されてゐた。

それは附添看護婦の口から洩れたらしいが、例の母子寮をめぐるつての色んな問題で、みんなの眼が私に同情的にそゝがれてゐるのを、私ははつきりと知ることが出来た。

或る朝だつた。

突然耳看護婦が私の部屋へ駆け込んできた。



「下川さん、大變よう……」  
私は何事が始つたのかと起き上つた。

「あなたの菌がとれたの……」

「えつ！」

私は思はず寢臺から下りた。

「本當かい？」

「本當ですとも、今院長さんがきますわ……」

私は胸の高鳴るのを感じた。

院長はいつにない元氣で私の傍へ走りよつた。

「下川君、愈々待望の日がきたよ。實は二三日前から菌はとれたのだが、尙念のため今日検査したところ、すつかり無い、これで無事放免だ、長々と御苦勞でした……」

私は言葉につまつた。

今日を豫期してゐなかつただけ、その歡喜は全身の血を波立たせた。

「ありがたう御座います……」

やつとこれだけ云へたのみで、私はくずれるやうに寢臺に腰かけた。

院長が去つてしまふと。

「よかつたわ下川さん……」

「よかつたね下川さん……」

と、次ぎ次ぎに、顔なじみの看護婦やその他の人々が、聲をかけにやつてきた。

「お蔭さまで……」

「有難う……」

と、同じことを繰り返して去つてゐるうちに、いつか私はすつかり涙聲になつてしまつた。熱いものが、何條も顔中を流れた。

そして、こんなにも多くの人々が、自分の身を氣づかひ、退院の身を喜んでくれるのかと思ふと、何んといふ仕合せな自分であらうと思つた。

今迄の此處における四ヶ月近い生活に何らの悔ひも残さなかつた。悔ひどころか、これからのけわしい人生への、心の備へを持つことが出来た。同時に、あたゝかき心につままれて私もあたゝかな心を抱いて歸つてゆくことが出来るのである。

しかし、ふつと、残された佐藤を思ふと永い間一緒に慰め合つてきただけに、見るに忍びなかつた。



佐藤は泣き出したいやうな顔をしてゐた。

「佐藤君、君にも御世話になつたなあ……」

「いやわしこそ……だが、あんたが行つてしまふと、わしは心細くなりますよ……」

佐藤は情無さそうに云ふ。

私は彼を慰める言葉がなかつた。

彼のために妻から送られた本などを全部残した。

「下川さんお達者で……」

私が病室を出るとき彼の聲は震へてゐた。

「君も出たら眞面目にな……」

私も鼻をすゝつゝ部屋を出た。

消毒風呂に入つて、すつかり全身を淨めると、始めて人間らしい気分が出た。

かうした時の爲めに、妻が置いて行つた用意の服に着代へると、何か借物のやうな感じがして、からだのやつれがよく解つた。

床屋に来て貰らつて、事務室の一隅ですつかり髻をすり落した。

「大丈夫かね下川君……」

院長は直ぐにでも歸りさうな私を氣づかつて云つた。

「はあ、大丈夫です、寝たつきりの病人ぢやありませんし、それに看護婦さんに送つて頂くつもりですから……」

私は元氣で答へた。

「それならいゝが、菌がとれたと云つても未だからだが充分でないから、よく氣をつけてくれ給へよ……普通ならもう少しして貰はなくはならんが、君にも色ゝと事情があらうから……」

さう云つてから、ふと氣づいたやう



に。

「家の方はどうします？」

「はあ、僕は不意に歸つてみんなを喜ばしてやらうと思ふんです……」



「はい、それもいゝでせう……」

そして、院長は退院後の注意を色々と與へてくれた。

昭和十五年十二月十五日――

病に倒れてから百十五日目、私は明るい太陽の下へ出ることが出来た。皆で門まで送つてくれた。

「下川さん元気で……」

人々の聲をうしろに私たちは外へ出た。

やゝもすると、ふらつきそうな身を竹の杖にすがつて歩いた。

「大丈夫でせうか？」

うしろに續く看護婦は時折聲をかける。

街道を冷めたい富士風が、ひう／＼音を立て、吹きまくる。

風の向ふに寒々と雪の富士がそびへ立つてゐる。

私はオーバーの襟を高く立て、病院の方を振り返り振り返り歩いた。

いつ迄も病院の白い壁が見える。

あゝ、苦難の思ひ出の一頁よ……

「K町よ左様なら……」

去りゆくK町へ、汽車の窓から頭を下げた。

汽車はまつしぐらに、私のデマの亂れ飛んでゐる故郷の町へと走つてゆく。

夕方近く私たちはS市へ着いた。

S市がどんな顔をしてゐるか、見知りの人が逢つたらどんな顔をするか、上陸第一歩の印象を得るために、わざと賑やかな町通りを歩いた。

生憎と誰れにも逢はない。

たゞ廢墟の街にところどころ新しい建築が見えた。

私たちが堀端沿ひに歩いてくると、一群の小學生たちが駆け足で通り過ぎて行つた。

その列を離れて私の方を振り返る少年がゐた。

光夫だつた。

私は手を上げた。

呼ばうとした。

しかし、先生に引卒されての、どこかの歸りらしかつたので私は黙つて見つめてゐた。列を離れては振り返り、列を離れては振り返り、たうたう光夫は見えなくなつてしまつた。



かなしい顔だつた。

私にすがり付きたかつたであらうが、さうもならず、泣きながら驅けて行つたのであらう……

家近くなつて、父と光夫が私を迎へにくるのに出逢つた。

先へ歸つた光夫が知らせたのだつた。

「歸つてきたか……」

父は涙聲で云つたきり、あとはお互に嬉しくてもものが云へなかつた。たゞ黙々と歩み續けた。

途中、看護婦を案内して父と光夫を先へ歸して、私一人で母子寮を見てゆくことにした。

母子寮は私の家の直ぐ手前にあつた。

私は獨り母子寮の庭に立つた。

私の設計通り立派に出來上つてゐた。

玄關に掲げられてある軍人援護會々長奈良大將の大額、硝子戸越しに見える講堂には、荒木松井山本三閣下の書が、立派な額となつて上げられてある。

想へば一年有半、あらゆる苦闘の果てに私の魂は表現されたのだ。あらゆる雜想が矢次ぎ早や

に私の胸にこみ上げてきた。

地位も財も教養もない一介の貧乏書生の手し、よくぞ此處迄出來上つたと思ふと、感慨無量だつた。

そして、一枚の瓦、一つの窓硝子によせられた人の情を、しみじみと感じたのである。

しかも、自分の留守中冷めたい人々の鞭の中に、此處まで守り續けてきた七十の老父と身妊つてゐる妻の苦闘を思ふとき、私は感極つてきた。

「お父ちゃん！」

光夫の知らせで、いつか七つになる英枝が私へかけ寄つてきた。

「英枝か……」

思はず杖を落して抱き上げた。

私にしつかと抱かれながら、英枝は聲を限りに泣き出した。

すでに日は暮れて夕空に星は冷めたく隣いてゐた。

光夫も私の傍らに寄つてきた。

私は英枝を抱きながら、私も母子寮を見つめながら心から泣けてきた。

光夫もつられるやうに私の腰にすがつて泣き出した。



暗くなるまで、私たち親子三人は、この主なき母子寮の庭先まで相抱いてゐたのである。

## 母子寮の歌

家に歸ると直ぐ落成式の準備にかゝつた。

一寸でも休養をとれば一度に疲労が出てきさうなので、この儘押し切つてしまふことにした。それに後援の人々や、助成團體に一日も早く落成の報告をしたかつた。又かげながら私の安否を氣づかつてくれた人々へ、元氣な自分を知らせたかつた。又一つにはクダラないデマの粉碎のためにも……。

歸つてから十日目、即ち十二月二十五日の大正天皇祭の日に落成式を擧げることにした。

やゝともすると倒れさうな體に鞭打つて、森一平に助けられながら、案内狀を書いた。

「おちさん頑張れ……」

私をおちさんと呼ぶアパートの若き新聞記者たちが、ロ々に激勵してくれながら、新聞への報道を引受けてくれた。

案内狀を全部出してしまつてから、一日、私は書棚の整理をした。

この母子寮建設を契機に、昔の運動時代の本を全部焼いて、晴々とした氣持で、スタートしたいと思つた。

人氣のない母子寮の庭に澤山の赤い表紙の本を山と積んだ。

その傍らに光夫を呼んだ。

「お父うさんはね、むかし、かう云ふ本を澤山読んで失敗してしまつた。そのために永い間苦勞をした。今のお前には何んにも解らないだらうけれど、お友達を選ぶのも、讀む本を選ぶのも、おんなじことだ、悪いものを選ぶと、いつ迄もかなしいことになる。よくよくお前たちは、これから氣を付けないといけないよ」

「なぜそんな悪い本を賣つてゐたの？」

するどい光夫の質問だつた。

私は返事に窮したが、

「さう云ふ本でも、お父うさんの若い頃には研究の爲めに賣つてもよかつたんだよ、讀むだけならかまわなかつたんだ。しかし、この本が日本のためにならない本だと解つたときには、みんな



なその本にかぶれてしまつてゐたんだよ、お父うさんもかぶれた一人だ、悪い本でも人の爲めになるやうに書いてあるので、お父うさん達はゴマかされてゐた。それが日本の爲めにならないことだと解つて、お父うさん達はやめてしまつた、日本に生れたお父うさんは、日本の爲めにならない事は死んでもいやだからね、こんなことはお前が大きくなれば自然と解ることだ、お父うさんはこの本が、未だ手許に残つてゐることに氣づいたから、お父うさんの爲めに、お前の爲めにお國の爲めに、今日此處で焼いてしまをうと思ふんだ、そして、この母子寮の建設を記念に、お父うさんは、もつともつとお國の爲めになる仕事をしたと思ふ、そして又お前も立派な日本人になつて貰ひたいんだ……。」

こんなふう云つた。

光夫は解つたのか解らないのか、じつと聞いてゐたが、足下の本の山をぐつと踏みにちつた。枯葉を集めてきて本をうづめた。

光夫が火をつけた。

黒い煙りが、風の凩いだ夕空へ、一筋に上つて行つた。

赤い表紙がべらべらと燃えて行つた。

何もかもが燃えてゆく。若き日のページが、昔のものが、煙りとなつてゆくのだ。

「光夫よ、さあ元氣でゆこう……。」

「うん……。」

父と子が見上げる空、黒い煙りの果てに星が一つ輝いてゐた。



昭和十五年十二月二十五日の朝——

母子寮の庭は早くから、子供たちの歌聲で賑った。

肩をならべて

兄さんと

今日も學校へ

ゆけるのは

兵隊さんの

お蔭です……。

なつかしい園児たちの聲だ。

永い間のお休みも、今日は母子寮の落成式で、みんなそろって招ばれてきたのだ。

庭に幔幕を張りめぐらし、玄關前に祭壇を設け、無数の椅子が保護観察所から運れた。

會する者百有餘名。

知事市長の代理を始め、市の有力者、司法關係の人々、岳南詩吟社、皇道駿府塾、久保、杉田、

森を始め多くの友人知己が集った。

東京からは、長い間私の身を氣づかつておられた市川先生が、戸波保護司とはるばる參會され

た。

吉田先生は代理として小橋直人君を參會させた。

大正天皇の御仁慈をお偲びするこの日、風もなく、くまなく晴れた大空の彼方に、母子寮の庭を遠く、富士の英姿が、悠久そのものゝやうにじつと坐つてゐた。

あゝ、よき日、よき朝。

涙の落成式は舉行されたのだ。

知事の祝詞、市長の祝詞、つぎつぎの祝詞は、私の感激をもち上げてゆく……。

とりわけ、小橋君代理の吉田先生の祝詞は、

「一介の下川の事業ではない、又誇りではない、よしその仕事が小さくとも、これこそ國家の事業であり、誇りである、吉田がゐる間は、下川の仕事を援助すると、S市の人々へ傳へてくれと云はれた……」

小橋君は力強く代理の挨拶を述べた。

それに呼應するやうに、商工會議所會頭の岩崎先生は、

一個人の力で一介の下川君がこの仕事を完成し得たのはS縣人の誇りである、これからの仕事も一層の努力が要る。どうぞ皆様の方で、下川君の仕事をもち立つてやつて頂きたい、自分もこ



の土地にあることだ、今後何かと應援したいと思つてゐる……」  
と云はれた。

この兩先生の祝詞は、傷つける今の私にとつての何よりの大きな激励だつた。  
さうした間に、私は感謝と今後の決意を兼ねた挨拶をやつたのである。

母子寮決算報告の一行一行の文字と文字との間に、どんなに尊い人の情がこめられてゐるかを  
語りつゝ、感極つて壇上に泣く私だつた。

そして日本人としての決意を披歴するとき、人々は皆、頭をたれて聞いてゐてくれた。

後の方で、父も泣いてゐる、妻も泣いてゐる、友みなが、久保が、森が、杉田君が、私の涙の  
視野の中に泣いてゐる。

最後に市川先生によつて。

「聖壽萬歳」が奉唱された。

「天皇陛下萬歳……」

冬空高く、大陸の果てまで響けよとばかり私たちは唱和した。

「天皇陛下萬歳……」

その聲は一切の雑念をよつ飛ばして、天皇歸一の日本精神の塊りとなつて、空の彼方にこだま

した。

(完)

(附 記)

全篇を通して登場の人物のほとんどを變名にした。自分としては、かうした記録物ではある  
し、多くの方々の御厚情に對しても本名を發表したかつたのであるが、それが返つて御迷惑  
でもかけるやうなことにでもなれば、恩を仇で返した結果になるので、殊更名を變へさして  
頂いた。従つて讀者の方には甚だ不明瞭な點が多々あると思ふが、それは皆様の御想像にお  
任せし、切に御諒承を願ふ次第である。



## あとがき

食しい一冊——。

拙ない記録を書き終へたとき、何か私は恥かしい気がした。

黙々と征き黙々と祖國に殉じた人々のことを思つたからである。

こればかりのことを、當然をさねばならぬ仕事をやつたに過ぎないことを、記録し出版するなどは、甚だ烏滸がましいことである。

始めは簡略な経過報告としてプリントにし、後援者各位に配る豫定が、友人知己にすゝめられるまゝに、たうとうこんなに書き上げてしまつたのである。

實に見つともないものが出来上つた。

文學的な要素の缺けた、見るからに骨ばかりな、はつたりばかりの記録が出来上つた。

しかし、私にとつては、これこそ一生を通じての思ひ出となり記念ともなるのである。又いとしい子供たちにとつては、この愚なる父の、この世に残すせめてもの片身となるであらう。

私がこれをつゞつてゐるときは、大東亞戦争ともならなければ、獨ソ戦も開始されてゐなかつた。

去年の八月始め、これを書き終へたのであるが、最後の「母子寮の歌」の百五十枚ばかりが、一寸發表しにくい、遠慮しなければならぬ個所があつて、又始めから書き改めなければならなくなつてしまつた。

そこで、母子寮の仕事の傍ら、こつこつと書いたので今日迄出版が遅れてしまつたのである。讀み返してみると、もつと書きたいことや除けてもいゝ個所が澤山ある、又最後の避病院に入つたときのことなどは、事實はもつと深刻な某事件であるけれど、この程度にしか書けない、これは讀者の想像に任せるより他はない。

だが、この食しい一冊ではあるけれども、すこしでも讀者に、私のちつばけな魂が、この大きな時代の嵐の中に、日本人として、戦ふ民族の一人として、眞剣に生きてきたことが解つて頂ければ、何より仕合せなことである。

まこと、世紀の嵐の中に、日本の逞しい夢は、一步又一步輝しく建設されてゆく。

御後威の下、神兵の果敢なる戦果は、たゞたゞ感謝の二字につきる。

しかし、戦ひはこれからだ。



大東亞建設への道は、より多くの棘の道を覚悟せねばならぬ。

このとき國民の一人として、いさゝかでも援護事業に挺身出来ることを無上の喜びとする。

今、私の母子寮では、僅かながら、遺家族の母と子が明日の勝利を期して、雄々しく生活を樂しんでゐる。

そしてそれを、微力ながらお守りすることが、今の私達に課せられた意義ある仕事である。

この一冊が出版される頃には、母子寮も、母たちの爲めの投産場の工事を始めたい。一切を自給自足でゆく爲めには、先づ産業部門の確立が必要である、

助成金や寄附による経営では、綱渡りをするやうなものである。

母と子の生活の確保のために!!

仕事の擴大強化のために!!

私は一層努力と挺身をしなければならぬ。

この一冊の記録の如く、母子寮建設は苦難の道であつたが、建設後の道も、より以上にけわしく又嵐もやつてきた。

母子寮の赤字を背負ひ、經營費に苦しみ、淋しい母と子たちの、色々な事件にぶつかりながら私は如何に今日迄歩んできたか?

そしてそれは、財政的基礎を持たぬ民間の貧しい社會事業人の、共通の悩みであり苦しみの姿でもある。

私はそれを、この記録の後、暇を見て「母子寮の四季」として書いて見たいと思つてゐる。

然し、こんなことを書いても、私は未だ價値のない一介の貧生に過ぎない、教育者でも宗教でも社會事業家でもない貧しい一轉向者の端くれである。かうした仕事も決して大それた考へから出發したのではなくせめて過去の思想運動のわずかな償ひとしてある。同時に、現在も今後、も幾多の鞭打たれるべき自分であることを知つてゐる。従つて、私の母子寮も會長や理事長は立派な人格者になつて頂いた。私はあく迄蔭の男として挺身してゆくつもりである。又、さうであらねばならぬ。

とまれ! 戦争は繼續中だ。

私達の全部をこの一戦にかけねばならぬ。

喰ふか喰はれるか? すべは私達の行動の如何だ。

徒らなる議論はやめて只管臣民としての實踐に生きるときだ、苦しみも一體悩みも一體、勝利の日迄私達は頑張り続けよう。私は私の課せられたる仕事を背負つて……。



終りに母子寮建設に御援助下さった方々、又この貧しい出版に激勵や御配慮を頂いた友人知己諸君には、此處を借りて厚く感謝の意を表すると共に、益々國家御奉公をお契ひして擱筆する次第である。

昭和十七年八月

著者

## 建設と彼に就いて

——跋に代へて——

母子寮理事 久保田 經  
報知新聞社 小宮 正海  
朝日新聞社 星野 政雄

儀太郎の一冊が出るに云ふので跋は名士にでも書いて貰へと云つた、が著者は是非自分達にといふ。そこで彼を知り彼の建設の苦闘を知る私達、それぞれの立場から、こんな一文を弄して跋に代へることにした。

久保田 經

垢染みた代用革の靴に夢を詰めて達磨のやうな男が三等車からこがり出た。

自分の家へ歸るやうな顔をして、此處へ越してき

てから始めての私の家へ轉り込んできた。その日から彼は八百萬の東京市民の中を轉々と夢を賣り歩くことになつたのである。財界や政界や軍人や官界の諸名士達の支關迄のよく掃除された玉砂利の上を、官廳や學校やビルのオフィスのドアの前に、一足の代用靴が何處へでも何度も無遠慮な音を響かせた。生れてこの方およそ頭を下げることの嫌いな男が、もて餘し氣味の肥つた體をお器用に蹴こ張らして、こべこと幾度も叩頭した。敬虔なたつた一つの夢、世にも尊い念願のために。

私は多くの場合黙つて歩いて歩いた。黙つて見てゐてさへるれば良かった。無口で無表情な私の顔を振り返つて、彼は勝手に悦び勝手に勵され勝手に元氣を取り戻し絶えざる情熱を燃しつとけた。かくて遂に彼は夢を現實によみがえらせた。「静岡愛國母子寮」が目出度く建設されたのである。

「夢を現實に根ざすユーモアの感覺を以て和らげるものが叡智である」といふ林悟堂の定義を採用すれば、この男は先天的に叡智の勝れた人であ



ると謂はれるかも知れない。しかしこの男は頗る無骨でむき出しで如何にも無器用に見える。始めは妙にたどたどしい話し口であるが、次の瞬間には滔々たる熱辯と變り相手は何時かその意氣に感じ其の主張を聞いてやらないではゐられなくなる、たとへ其の論理に少しばかりの矛盾があるやうな場合でも、彼の言葉にはいつも夢があり咄々たるユーモアが漂ふてゐる。その態度は少し許り尻が重く見えるが、進むに當つて恐しく勇猛である。若い頃は寧ろ猪突的だつた、只今三十八才、近頃反省的になつてきたことは嬉しい。

このやうな叡智は云はゞ内在的であつて所謂利口者には見えない、従つて利口だか馬鹿者だか解らない、見やうによつて恐しくするどく又餘りにも不器用な缺點だらけの男に見え出す。この男程敵が多く又味方の多いものも珍しい。友誼はそれは彼の性格の爲せる業だと云つてゐる、長所と缺點とが渾然として和合し文字通り表裏一體を存してゐると考へる人が多い。しかしそれは彼の勝れた叡智について究め

方が足りない所存であらう。

彼は豊かな詩才を有ち漢詩を吟じては仲々の達人である。往時の詩壇の異材は今日でも健在で、つねに青年の氣魄をもつ。誠に我儘な庇護者には誰にでも甘まへ過ぎる位甘え易い子供のやうな純情をもつてゐる。

彼には更に豊かな家庭がある。彼の妻と父母が協力して家業を營んで彼にかゝる仕事への後顧の憂ひをなからしめてゐる。その上彼女はこの寮の計畫される五六年も前から夫の經營する坪見所の良き母として獻身してきた、こゝに又彼が斯うした仕事に専念すべき好條件が恵れてゐることを私は忘れまい。

彼はこの建設事業の半に大きな障害にぶつかつた、それは誠に據ん處ない事柄であつた。

昔の新劇關係の飛ばつちりを喰つたのである。ところが之を良いことにして凡ゆる彼の敵性人が莫然と立腹いだ、ために一時は何事も知りつくし信頼してゐる私でさへも建設事業の挫折を恐れた程の妨害が次ぎ次ぎに起きた。

文字通り必死の建設への道を歩んでゐた彼だけに

此の豫期しない障害と敵性人の妨害のために其の衝動によつて、からりと希望を喪つて性格破産者となるまいものでもないと日夜私は心配した。然るに彼は何時も純情な氣持で夢を持ち續けてくれた。そこで障中の中に傷だらけの身を見事立直つた。私は涙ぐんで彼を見守り彼の立派さがあるがまゝに褒賞せざるを得なかつた。

私はいつか敬愛せる長友下川の人物批評めいたものを書いて了つた。たゞ一途に世の多くの人々にこの著者を可愛がつて頂きたいために外ならない。

尙この記録を讀んでみて、單なる記録だと著者は謙遜してゐるけれど、さすがに香り高い詩情が溢れてゐる。私は彼がこの一冊を契機として其の事業の傍ら生々しい幾多の體驗を生かし本當の作品を書いてみたらと思ふ。

序で乍ら私は茲に彼の後日語りを豫告すれば、母子寮の事業は適當な人格者に一任して自分は専ら兵站線に廻りながら、又新らたなる夢に向ひつゝあ

る。なるかならぬか、ともあれ、つねに夢を棄てず夢に生き夢を現實化してみようと努力する彼、彼の生長を期待して私は今から楽しんでゐる。

誰れかこの一冊の無軌道男に遊んでゐる財を與へるものは無いか。

小宮正海

私もこの一冊へ登場する一人であるが、この一冊の終りへ友人として一言彼の爲めに書き加へておきたい。

下川君と云ふより「やあ儀ちやん！」と呼ぶ方が甚だなつかしい。といふ譯はその昔、私は彼の經營する故郷のアバートに厄介になつてゐて一つ釜の飯を喰べ合つた仲だからだ。

その若い親父がこんなにも良い仕事をやつてくれるとは思はなかつたし、これほどの逞しい氣力を持つた男とは知らなかつた。尤も昔から變り種だつた。プロ詩人として有名だつたが、すつかり轉向してアバート業を飯の種として、その餘暇の全部を、



世間から不生産的な仕事だと笑われながら托見所などをやつてゐた。今度のこの母子寮建設も彼のその延長と云へば云へるが、然し、あまりにも波瀾にとんだ建設だつた。この一冊の記録以上に事實はもつと深刻であり、傍にそれを見てき又手傳つた私達は、よくも此處迄頭張つてきたと今更乍ら彼の勇氣には驚嘆した。

なる程金額にすれば二三萬のちつぽけた仕事だ、然し、人を蹴倒しても儲けようとする人の多い世の中に、生命をうち込んで、故郷を遠く、この帝都のどまん中に出てきて、一介のしかも信用のない一轉向者で、故郷へ遺家族母子寮を建設するなどは、容易に出来得るものではないと思ふ。この一冊の批判は出来てもこの行動は云ふは易く仲々行ひ難ひものだ。しかも、名利を求めめるでもなく、たゞこの時局下に僅かでも御奉公したいと、又過去の思想運動の（ほんの僅かではあつたが）悲しき償ひとして、ひたむきに突進してきた彼の姿の前に、只私達は人知れず涙し一つの道標となつてやつたに過ぎない。

家ぶり社會事業家ぶる人の中に、いかに名利に囚はれた人の多きことか。私は赤裸々に生きてゆく前者の姿の中に豊かなる人間味と愛情を痛感する。彼はそんな男だ。

悩みを悩みとし苦しみを苦しみとし鞭を鞭として、あくまで彼は彼の信念に生きやうとする。恐らく今後といえど、この記録以上の凄しい人生が横るかもしれない、しかし、彼はきつと生きるだらう、よき仕事への建設へ猛進するだらう、今度の仕事はその前提だ。好漢惜しむらく裸一貫だが、その氣魄が又新らたなる理解者を生むであらう。

まことにこの一冊は彼の生命の表現であり赤裸々な姿であり、この一冊の持つ時局下の役割りは實に多々あると思ふ。一人でも多くの人に讀まれんことを私は切望してやまない。

終りに、

好漢下川よ!! その逞しい氣魄を失ふ勿れ!!

次々と多くの人々が軍事援護の功勞者として表彰されてゆく時、彼は黙々として一介の貧しい名もなき建設者として、建設の赤字とその經營に東奔西走してゐる。まことに嬉しい姿である。私は世の人々に告げたい、數多くの立派な軍事援護の功勞者の外側を、かうしたケタはづれな男が、報ひを求めず何人も何人も黙々と歩んでゐるであらうことを。

しかも、  
「私は貧しい建設者に過ぎない、愚かなる經營者としての存在であつて、指導者でもなければ社會事業家ではない……」

さう云ふ彼、一切を立派な人に一任しやうとする彼、どこ迄も自己を滅し、どこ迄も下積みに任じやうとする彼、そこに彼の精神の躍動があり、こゝに私達の彼を愛する所以でもある。勿論、彼にも色々の矛盾と反省の個所は多い、しかし、どんな立派な人でも多くの矛盾と反省の個所はひそんでゐる。それをムキ出しに生きてゆくか又ひたかくしに生きてゆくか? 只それだけだ。教育者ぶり政治家ぶり宗教

## 人間・下川儀太郎

星野政雄

畏友下川儀太郎はマレノ戰線の表現を藉りれば近代的理性に武装され烈々たる熱情を動力とする装甲車である。巨人ゴーレムの如く無人の曠野をひたむきに走る熾進力は蓋し餘人の追従を許さぬ壯觀である。

若き日の彼は「路上に吼ゆるもの」「再び立ち上る日のために」等々の情熱にちりばめられた珠玉の詩篇を名残りとして社會理想家としての第一段階に決別したのである。

しかし、止みがたき社會理想家下川儀太郎の奔り出る情熱は亞細亞の歴史に曙光を點じた支那事變の勃發とともに、大きな質的飛躍と轉向を生み出し大君の醜の御盾と消え去りし、皇軍將士の遺家族の



後述にその進路を見出したのであつた。

舊階制的社會事業家の無氣方と、暫間的性格を睡棄する彼に、飽迄、独自の立場において、彼の事業を建設推進したのである。

當時、軍官民ともに、正直に言へば、この事業の重要性は認めながらも、確たる方法論、を樹立してゐたものは、誰もなかつた。殊に、退嬰的な静岡縣民の間に、誰しも夢想しなかつたとき、敢然この事業の、戰時的緊要性を高唱して、立上つたところに、彼儀太郎の眞面目があつたのである。

彼の建設日程は、苦難に富み、年月を要した。

私は仕事柄、朝が遅い。その滋谷の寓居の寢室に屢々彼の元氣潑刺たる書面が、襲うたのである。

「下川さんといふ方が御見えになりました。」

家人が朝の新聞とともに、訪客を通ずると早くも、儀太郎のけたたましい脚音は階段を、きしませる。

「一木さんのところで、暴力團と間違へられてね、困つちやつたよ、これで五回目さ。」

前觸れして、彼は、健啖に静岡縣先輩訪談を、一席辯ずる。考へて見れば儀太郎の無難な弊衣破帽が玄關子を戸惑ひさせるのは無理からの現象である。

然し乍ら如何なる困苦、頑敵に、遭遇しても彼の表情は、常に爽か、平調であり愉しきである。

この男の逞しき溢れ出る實踐力に、私は戸惑ひし心中感歎の聲を發したこと屢々である。

東京に、大阪に、静岡に……母子寮建設資金獲得のために、彼は寧日なく、疲れを知らなかつた。彼が、建設の最後の段階に、遭遇した困難は、常人であれば、直ちに絶望の底に叩きつけられるほどの運命的なものであつたが、彼の不屈不撓の氣魄は、この障害をも克服して、輝かしい金字塔を樹立したのである。

社會の誤解も、迫害も、儀太郎の意志を厭殺し得るものではなく、嵐に抗して轟進する。彼の姿を彼の手記は再現するであらう。

彼の仕事の功績の半ばは常に彼の、よき同志であり、生活の伴侶である靜江氏は捧けられなければならぬことを最後に強調したい。

動と静、強靱と柔軟……外そ儀太郎と對蹠的な性格を持つ彼女は儀太郎のよき理解者として、彼の激しさ、性急さを蔽ひ乍ら、後顧の憂ひを一掃して彼の才幹の奔放なる驅使を可能ならしめたのである。

私は、彼女の絶えざる物靜かな微笑の中に、日本職人の一つの典型的な様相を見出すのである。微笑は、諦觀に非ず、禪脫に非ず、内省の中に来るべきものへの強き意慾を盛り上げてゐる。

彼女は、母子寮託児所のよき保母として、いつも愛情を、父を喪つた幼き子供たちに慈雨のやうに浸透させてゐる。

彼女は、また經營するアパートに住む若き文化人諸君のよき理解者であり、慈姉の温い手を差伸べてゐる。嘗ても、現在も、このアパートの一隅から、静岡文化の一段面が、芽生へてゐたことを否定出来ないし、それは、彼女の隠れたる功績である。

母子寮建設に、社會理想家として第二段階を確立した儀太郎は、更に、第三段階に飛躍すべく、いま

摸索してゐる。彼の進んで止むなき努力と意慾こそは正しく現代が要望する「清新強力なる政治力」である。

それを、彼は急湍の如く奔り激襲する文化社會の潮流の中に生かさうと努めてをり、幸ひにも、よき協働者に恵まれてゐる。

彼獨得の野性に滿ちた豪放大膽なる企畫と創意による第三の飛躍に赫々たる戰果を期待するものは、筆者だけではあるまい。

儀太郎！ 頑張れ！



出文協承認  
ア50424號



昭和十七年八月十五日印刷  
昭和十七年八月二十日發行

(初版壹千五百部)

母子寮の歌

定價 壹圓七拾錢

著者 下川 儀太郎

發行者 大江 專一

東京市京橋區豐島一丁目十番地  
東京市芝區新橋三丁目二〇番地  
東京プリント株式會社  
更生社

印刷者 吉 福 實

東京市神田區淡路町二丁目九番地  
配給先 日本出版配給株式會社

東京市京橋區豐島一丁目十番地

四元社

會員番號 一一二一三一三番  
電話 京橋(56)〇二四五番  
振替 東京一八四〇三六番

發行所

(東京 1203)



25390

# 印度と印度人

中央大學講師 飯村英一著

B6版三八六頁 上製 定價 二圓五十錢 送料二十錢

印度に關する最も確實たる最新資料を根據として風土・住民・宗教・風俗・政治・經濟  
資源・産業・交通・軍事等を精細に記述し、更に現代印度の指導者群像を點描せる權威  
書。著者は貿易斡旋所主任としてインドに在りし新進學徒である。

# 昔話とわらべうた

伊藤信吉著

B6版二九八頁 挿繪三十 上製函入 定價二圓六十錢 送料二十錢

大東亞戰爭の發展につれてわが國の偉大性がしみじみと感ぜられると同時に世界無比  
の皇軍を産んだ郷土に對する愛着心はいよいよ強くなる。この時にあたり郷土につちか  
はれた昔話とわらべうたの再認識は蓋し意味なしとしない。本書は専ら著者の文學的立  
場から昔話と童唄を研究解説した異色のある勞作である。



945  
128



